

『易行品』―十住毘婆沙論―における一考察

この度、易行品を学ぼうと思う。易行品は、浄土系仏教には大切な書であり、それは、龍樹菩薩の書かれたものである。しかし、何故十地経に書かれていない易行品がそこに書かれているのか、また、龍樹の書かれたものでないと論争もある。なお、本書は、ウィキアークを使用した。

易行品について

「易行品」（いぎようほん）は、『十住毘婆沙論』全十七卷三十六品の内、第五卷九品に「易行品 第九」として収められている。浄土真宗の聖典のひとつ。

『十住毘婆沙論』（じゅうじゅうびばしやろん、梵: *Daśa-bhūmika-vibhāsa-sāstra*, ダシャ・ブーミカ・ヴィバーシヤ・シャーストラ）は、大乘仏教中観派の祖・龍樹による、『華嚴経』の「十地品」としても知られる『十地経』（梵: *Daśa-bhūmika Sūtra*）に対する註釈書。全十七卷。

原題は、「ダシャ・ブーミカ」が「菩薩の十の修行位階（十地・十住）」（ここではそれについての経である『十地経』のこと）、「ヴィバーシヤ」（*vibhāsa*）は「註釈・解説」、「シャーストラ」（*sāstra*）は「論・書」、総じて「菩薩の十の修行位階（についての経である『十地経』）についての注釈書」の意。

概要

5世紀初め鳩摩羅什が訳した漢訳のみが現存し、サンスクリット原典・チベット訳も見されていない。現存する漢訳は、偈頌と散文とできており、偈頌の内容を散文で解説している。しかし、散文の部分については龍樹作とすることに疑問がもたれている。

鳩摩羅什は、インド僧仏陀耶舎（ぶつだやしや）が口誦したものを漢訳したと言われている。しかし、翻訳について両者の意見が対立して未完に終わった、と伝えられている。

これは、鳩摩羅什の翻訳方法が、多分に彼自身の解説や、彼自身が記憶する仏典を交えながら翻訳する形態を採っているので、散文にはそれが多分に入っていると考えられる、

本書は、『華嚴経』の一部である『十地経』（じゅうじきよう）の注釈書であるが、大乘菩薩の思想と実践を『十地経』に依拠して説いたものである。

後世、浄土教の念仏易行道（ねんぶついぎようどう）を説く、巻第五「易行品第九」（いぎようほんだいく）がとくに注目された。この章についての研究は多いが、全体としての研究は多くない。また浄土真宗において、龍樹は七高僧の一人に数えられ、この『十住毘婆沙論』巻第五「易行品第九」は、浄土真宗の正依の聖教（七祖聖教・七高僧論釈章疏）の一つである。龍樹の『菩提資糧論』（ぼだいしりようろん）との関係も深いので、大乘仏教を理解するうえで、きわめて重要な論書である。

構成

『十住毘婆沙論』は、以下の通り一七巻からなり、内容は三十五品に分かれている。

巻第一

序品 第一

入初地品 第二

巻第二

地相品 第三

淨地品 第四

釋願品 第五

巻第三

釋願品之餘（釋願品第五之餘）

發菩提心品 第六

巻第四

調伏心品 第七

阿惟越致相品 第八

巻第五

易行品 第九

除業品 第十

巻第六

分別功德品 第十一

分別布施品 第十二

巻第七

分別法施品 第十三

歸命相品 第十四

五戒品 第十五

知家過患品 第十六

巻第八

入寺品 第十七

共行品 第十八

巻第九

四法品 第十九

念佛品 第二十

巻第十

四十不共法品 第二十一

四十不共法中難一切智人品 第二十二

巻第十一

四十不共法中難一切智人品之餘

四十不共法中善知不定品 第二十三

巻第十二

- 讚偈品 第二十四
- 助念佛三昧品 第二十五
- 譬喻品 第二十六
- 卷第十三
- 譬喻品餘
- 略行品 第二十七
- 分別二地業道品第一（分別二地業道品 第二十八）
- 卷第十四
- 分別二地業道品之餘
- 分別聲聞辟支佛品第二（分別聲聞辟支佛品 第二十九）
- 卷第十五
- 分別聲聞辟支佛品之餘
- 大乘品第三（大乘品 第三十）
- 卷第十六
- 護戒品第四（護戒品 第三十一）
- 解頭陀品第五（解頭陀品 第三十二）
- 卷第十七
- 解頭陀品之餘
- 助尸羅果品第六（助尸羅果品 第三十三）
- 讚戒品第七（讚戒品 第三十四）
- 戒報品第八（戒報品 第三十五）

十住毘婆沙論　じゅうじゅうびばしゃろん十住毘婆沙論一七卷。竜樹（ナーガール
 ジュナNāgārjuna）の造と伝える。後秦の鳩摩羅什の訳。十地経（華嚴経十地
 品）の中、初地・二地の部分に対する釈論。三五品に分けられるが、第一序
 品は総論、第二―四品は菩薩の初歡喜地の内容を述べ、第五―二七品は歡喜
 地に入るためになすべき行を説く。第二八品以下は第二地の相を述べる。論
 中に大乘經典よりの引用が非常に多く、特に般舟三昧経・宝頂経・郁伽長者
 経との関係が深い。諸部派の中では犢子部につながりが深いのではないかと
 思われる。十地経の註釈としては未完成であるため十地思想の点では重視さ
 れていないが、第九易行品に難易二道の説があり、曇鸞がその著、浄土論註
 にそれを引用してから、この論は広く中国・日本の浄土教家の間に依用され
 る。浄土真宗では易行品を七祖聖教の一に数えている。㊦二六、国一 釈経
 論部七（総合）

郁伽長者　（梵）ウグラ S: Ugra（田）ウツガ P: Uḅga の音写。威徳と訳す。毘舍離（び
 しゃり）の長者。毘舍離の大林で淫楽にふけている時、仏陀にまみえて
 帰依し、在俗の信者として梵行を修した。（総合）

(とくしぶ、梵: Vāsiṣṭriya, ヴァートシープトリヤ)は、釈迦の没後300年頃に分派した、部派仏教の一派である。上座部系の説一切有部から分派した。この派は、輪廻の主体としての人格的主体である補特伽羅(ほとがら、梵: Puṅgala, プドガラ)を、五蘊のほかにも想定したことが特徴である。その理由は、生命とは五蘊の仮和合(けわごう)によつて構成された仮の存在で実体を持たない(無我)という説と、人間が死んだ後に輪廻するとうい、二つの説を説明するためであると考えられる。

「主体が存在しない輪廻」の理解に苦しんだ後代の仏教徒が、無我説と輪廻説をつなぎ合わせるために、苦肉の策として、無自性である五蘊の他に、死後も存続する補特伽羅を想定した。この説は、輪廻に主体を想定するため、補特伽羅という名称で常住の主体(アートマン)を認めることになる。結果、常住論に陥るため、理論上、輪廻の解脱を語るができなくなつてしまう。

(ウイキアーク)

犢子部ではやはりプドガラを想定し、「それは五蘊と同一でもなく、また別異でもない(非即蘊離蘊)。ただ五蘊・十二処・十八界の和合しているものを仮りにプドガラと名づけるのである。諸法がもしもプドガラを離れているならば、前世から後世に移つて行くことはありえない。プドガラによつてこそ前世から後世への移転がありうるのである」と説く。基はいう、「このプドガラは我である。有為でもなく、無為でもない。五蘊に即して、いるのでもなく、離れているのでもない。仏が無我と説きたもうたのは、外道等が想定するような、五蘊と同一あるいは別異なる我を否定したのである。このような我は全然存在しないが、しかし、不可説にして五蘊と同一でもなく別異でもない我が存在しないというのではない。これは不可説であるから、その形量大小等を行うことはできない。その我は仏と成るに至るまで常に存在する。死んで生命(命根)がなくなつても、この我は死滅しない」と。このような見解は犢子部から分派して成立したところの法上部、賢胃部、正量部、密林山部にも及んだといわれる。

ある所伝によると、大衆部の經典の中には根本識というものが説かれ、化地部はこれを名づけて「窮生死蘊」と呼び、また正量部は「果報識」、上座部は「有分識」というものを立てていたという。ともかく、このような思想にもとづいて後の唯識哲学においてはアーラヤ識という原理が想定されるにいたつたのである。

さて、このように我を立てると、仏教の無我説の立場に背くことになるので、伝統的・保守的な諸部派はこのような見解に反対した。現在、スリランカに伝わっている上座部はみずから無我説を標榜して、我を説くプドガラ論者の説を排斥している。また説一切有部では「世俗のプドガラ」を認めていたが、そのみにとどまり、実我の觀念に対しては反対していた。

また後に、シナにおいてもこれらの諸部派の立てる私の意義が問題とされて、大いに論ぜられるにいたった。これらの諸部派は、我と法とがともに存在すると説くのであるから、賢首大師法蔵は、その十宗の教判において、これを「我法俱有宗」と名づけ、澄観はこれを「附仏法の外道」といって貶斥（へんせき）している。そうして、仏教のなかではもつとも低劣なものである、と解している。 原始仏教から大乘仏教へ 中村元

上座部

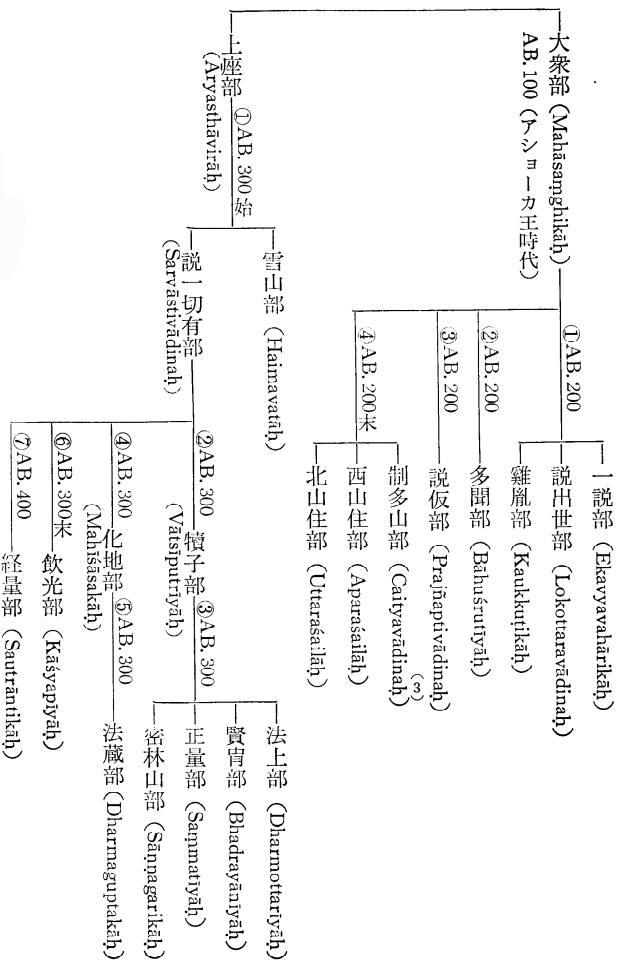
じょうざぶ

仏教部派の一つ。仏滅100年ごろ仏教教団は上座部と大衆部(だいしゆぶ)の二つに分裂した。これは根本分裂と呼ばれ、部派仏教の時代の幕開けとなった。サンスクリットでスタビラ・バーダ shavira-vāda、パーリ語でテーラ・バーダ Theravāda という。根本分裂の原因については南・北両伝で大きな相違がある。南伝の《島史(ディー・パバンサ dipavansa)》《大史(マハーバンサ Mahāvansa)》によれば、分裂の原因は十事問題である。十事とは従来の教団

の規則(戒律)を緩和した十の除外例であり、この中には(金銀を蓄えてもよい)という条項も入っている。この十事を認める進歩派は、多人数であったので大衆部と呼ばれ、この除外例を認めない厳格派は少人数で長老上座が多かったので上座部と名づけられたという。一方、北伝の《異部宗輪論》によると、その原因は五事問題であったという。五事とは、修行者の達する究極の境地である(阿羅漢(アルハット arhat))の内容を低くみなす五つの見解のことである。この五事を認めたのが大衆部となり、反対したのが上座部となった。

根本上座部は《異部宗輪論》によれば雪山(せつせん)部(ハイマバタ Haimavata)とも呼ばれたという。上座部の教義は明らかではないが、その後200年してこの部派はさらに分裂を繰り返し、その中の犢子(とくし)部、化地(けじ)部、説一切有(せついつさい)部、法蔵部、経量部などは精緻にして特色あるアピダルマ(論蔵)を構成して、部派仏教(小乗仏教)の展開に大きく貢献し、仏教思想全体に多大な影響を与えた。⇒大衆部 加藤 純章 (世界)

諸部派系統図 (『異部宗輪論』247c) (AB = After Buddha's Death)



ど、ある部派は經典の文句に対する解釈の相違から分裂した(たとえば法上部・賢胄部・正量部・密林山部は一偈の解釈を異にしていた)。ある部派は主張者を中心として分れた(たとえば犢子部など)。ある部派は地理的に遠隔なるために分離した。雪山部という部派の存在は、仏教がヒマラヤ山脈地方でも確立していたことを示す。

これら諸部派の分裂は紀元前一〇〇年ころにはほぼ完了したらしい⁽⁴⁾。これらのうちでも上座部系統の説一切有部・犢子部・正量部・化地部・経量部はとくに重要である。

とくに中央アジアでさかんな活動を示したのは説一切有部と正量部であり、グプタ王朝時代にまで及んでいる。

有部は東南アジアにもひろがった。義浄は六八八年から六九五年までシリールヴィジャヤ(Srijiaya)王国に滞在したが、そこには千人以上の僧侶がおり、その大部分は根本説一切有部(Mūlasarvāstivādin)に属していたという⁽⁶⁾。

上座部系統の諸部派は、教理においても実践に関しても概して保守的伝統的である。社会の上層部は上座部系統を支持していた。南方アジアの仏教はみずから上座部と称する。

他方、大衆部系統は概して一般民衆に支持されていたために、実社会と緊密な接触を保ち、その影響を受け、時勢に即応する進歩的改革的態度を持っていた。したがって、時代の経過とともに複雑な変遷を経て、ついに大乘仏教を成立せしめるにいたるのである。

(一) スリランカでは寺院(vihāra)というときには、次の五つから構成されている。

150 - 250年ごろのインド大乘仏教の哲学者。生没年不詳。サンスクリット名をナーガールジュナ nāgārjuna という。南インドのバラモン出身で、若くして小さいの学問に通じ、隱身の術により後宮に入って快樂を尽くしたが、欲望は苦の原因であると悟って出家したと《竜樹菩薩傳》に伝えられている。彼は、大乘仏教の基盤であり、《般若経》で強調された、《空》の思想を哲学的に基礎づけ、後世の仏教思想全般に決定的影響を与えた。これを評価して、中国や日本では《八宗の祖師》と仰がれている。彼は、その主著《中論》(正確には《中頌》)において説一切有部(せついつさいうぶ)を代表とするいつさいの實在論を否定し、すべてのものは真実には存在せず、単に言葉によって設定されたのみのものであると説いている。この主張を受け継いで成立したのが中観派である。竜樹の真作とされるものには、そのほかに《廻諍論(えじょうろん)》《空七十論》《広破論》などがある。漢訳にのみ存し真作が疑われるが、中国、日本に重要な影響を与えたものに、《十二門論》《大智度論(だいちどろん)》《十住毘婆沙論(じゆうじゆうびばしやるん)》がある。竜樹の思想は、クマラーラジーバ(鳩摩羅什)によつて中国に伝えられ、その系統から《三論宗》が成立した。また一方、シャーンタラクシタによつてチベットに導入され、ツォンカパを頂点とする全チベット仏教(ラマ教)教学の中核をなしている。なお8世紀以降のインド密教においても、竜樹を著者と仮託する、《五次第》などの多数の文献が著された。

松本 史朗

「伝承、医術」 竜樹菩薩は樹下で生まれ、竜宮で成道したので竜樹と称したと伝えられるが、《今昔物語集》巻四・24の《竜樹、俗ノ時、隱形(おんぎよう)ノ薬ヲ作りタルコト》と題する説話がある。説話では、竜樹が使った隱形の薬は異教の經典にあつた術で、寄生木(やどりぎ)を5寸くらいに切り、100日間、陰干しにしたもの。髪に挿していると隱蓑(かくれみの)と同じように姿を隠すことができると思はれていたらしい。古代に日本で神事に列席する貴人らが冠の心(こころ)がい(い)にヒカゲノカズラをかけて清浄を表したのに似ている。なお《医心方》には、唐代に著された《竜樹菩薩方》(《竜樹方》)からの抄録がある。また、養生書には《竜樹菩薩養性方》、香方粉沢の書としては《竜樹菩薩和香方》、祝由術の書には《竜樹菩薩印法》《竜樹呪法》などがあつたほか、沙門、菩提による《竜樹菩薩馬鳴菩薩秘法》という文献があつた。

槇 佐知子

(世界)

『易行品』は、『十住毘婆沙論』の中に書かれている。『十住毘婆沙論』は、『十地経』の初地と二地の一部が説かれている。『十地経』は、『華嚴経』の十地品である。『十地経』の注釈書である『十住毘婆沙論』に十地経にない『易行品』がなぜ書かれているのか。

真宗七祖の教学 寺倉讓によると、

龍樹が『十住論』に「易行品」を開説し、弥陀易行を説いた所以は如何というに、これは本経たる『華嚴経』の終り「入法界品」を見ねばならない。すなわち、ここに出ずる善財童子の求道物語は、文殊に始まって五十二番目に弥勒の下に至り、一応求道の旅は終わっている。しかし、再び文殊菩薩のところへ帰れと注意され、善財は再び文殊のもとに至り、その苦しい求道の跡を物語った。文殊（聖道の智慧）は普賢菩薩（浄土の慈悲）を推奨し、善財は普賢より阿弥陀如来の本願力の救いを聞いて、ここに求道の目的を果たした。普賢の説いた他力浄土教は極めて簡単ではあるが、ともかく西方弥陀の易行道をもって、この物語を結んだのは、じつに意義深く、龍樹はこの善財を自己の上に見て、浄土教に心をひかれ、三経、特に『大経』を熟読し、特にその中の「易往而無人」の経語に着眼し、それを基礎として『華嚴経』を窺い、初地不退を積するに難易二道を開き、諸仏、諸菩薩の易行を紹介しつつ、しかも西方一仏章に特に力を入れたのではなからうか。かかる意味において、龍樹の弥陀易行を説いた所以を窺うべきであろう。

華嚴経 中村元

「華嚴経・十地品」では、十地の説というかたちで述べられています。これは道を求める人が進んでゆく過程を十種の段階に分けて説いたものです。

修行の十の階梯とは歓喜地・離垢地・発光地（明地）・焰慧地（焰）・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地です。

第一は歓喜にあふれる、という意、第二は汚れを離れた、第三は明るく光る、第四は光明に輝く、第五はうち勝ち難い、第六は真理の境地が目あたり現れる、第七ははるか遠くに行く、第八は動揺しない、第九はみごとく智慧がある、第十は限らない法の雲のような、という意味です。

後代の教学では、菩薩が修行すべき五十二の段階のうち、とくに第四十一位から第五十位までを十地といっています。

修行の心がけについては、晋訳の「梵行品第十二」で正念天子という神が、法慧という菩薩・求道者に三つのことを質問します。

第一に梵行、浄らかな行いとは何であるか。

第二に修行の実践とはどういうことであるか。

第三に修行の結果、いかなる境地に到達するか。

そして、第二の修行の過程を説くところで、結論として次のように述べています。

【漢文書き下し文】

（前文略）「是の如く、如来の十力の甚深にして無量なることを観察すれば、大慈悲心を

具足し長養して、悉く衆生を分別して、而も衆生を捨てず、亦寂滅をも捨てず、無上の業を行じて、果報を求めず。一切の法は幻の如く、夢の如く、電（いなずま）の如く、響の如く、化の如しと観ず」。

（晋訳『華嚴経』梵行品第十二大九卷四四九下）

『華嚴経』入法界品は、善財童子が53人の指導者に教えを受ける場面です。東海道五十三次はこの経に基づくといわれています。

『華嚴経』は、普賢菩薩の慈悲と文殊菩薩の智慧を説いていますが、普賢菩薩の利他大悲の行をあきらかにすることを目的としています。

第五十二番目の善知識 弥勒菩薩は、善財童子に文殊のところへ行き、菩薩の行を尋ねるが良いと諭します。

第五十三番目 普賢菩薩

『華嚴経』 中村元

普賢の願をとなえる

以下の漢訳には、現存のサンスクリット原典にない句も挿入されています。

【漢訳書き下し文】

願わくは、我が命終らんと欲する時に臨み、一切の諸の障礙を尽（ことごと）く除きて、面（まのあた）り彼の仏・阿弥陀を見、即ち安樂刹（極樂浄土）に往生することを得ん。

我が既に彼の国に往生し已らば、現前に此の大願を成就す。

一切円満にして尽して余り無し。一切の衆生界を利樂せん。

彼の仏の衆会は威（みな）清浄なり。我は時に勝れたる蓮華に生ず。

親しく、如来、無量光（アミターバ仏）が現前に我に「菩提〔を得〕」との記を授けたもうを観る。

彼の如来に授記を蒙り已って、化身は無数百俱胝なり。

智力は広大にして十方に遍ねく、普ねく一切の衆生界を利す。

乃（すなわ）ち虚空世界の尽くるに至るまで、衆生及び業と煩惱とは尽く。

是の如く一切が尽くること無き時には、我は、究竟して恒に尽くること無きを願う。

十方の有（あ）らゆる無辺の刹（くに）は、莊嚴なる衆宝を如来に供（そな）う。

最勝の安樂を天と人とに施し、一切の刹の微塵ほど「多くの」劫を経るとも、

若し人が、この勝れたる願王〔普賢行願〕に於て、一経すら耳にして能く信を生ずるに

勝れたる菩提を求むる心にて渴仰せば、勝れたる功徳を獲ること、彼に過ぎたり。

即ち常に悪知識（悪い友人）を遠離し、永く一切の諸の悪道を離れ、

速かに如来・無量光に見えん。

此の普賢の最も勝れたる願を具えなば。

注

(1)俱胝 くてい サンスクリット原文では *koṭi* 千万のことだという。「億」と訳すこともある。

【サンスクリット原文和訳】

それによつて、かれらはもろもろの悪い境地〔三悪道〕から離れ、悪友も遠ざかるでしよう。

この〈すばらしい行い〉をしようという誓願を立てている人は、すみやかに、かのアミターバ〔仏〕を見るであろう。〔四九〕

注

(1)アミターバ サンスクリット原文には *Amitābha* とあるのに、不空は「無量寿」と訳している。「無量寿」という語がすでに中国人のあいだで定着していたのであろう。

(2)この詩句から、阿弥陀仏にたいする信仰が説かれている。

こので「普賢の徳」について考えたいと思います。浄土教の『仏説無量寿経』のはじめ菩薩嘆徳に「普賢大士の徳に遵い」と記されています。「普賢の徳」とは何か。また、大乘経典でどのように使われているか、経典で意味は異なるのか、また、経典の製作年代で意味は異なるのか精査しなければなりません。

普賢の徳は、大乘仏教の慈悲心です。そして、普賢の徳が、阿弥陀仏への帰依であるならば、憊弱怯劣の菩薩が阿惟越致に至るには阿弥陀仏への帰依以外にないと易行品には説かれています。

親鸞聖人はその著書で「普賢の徳」をどこで使用しているでしょう。

しかれば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵ふなり、知るべしと。・

(教行信証 行 192頁)

その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱して諸仏の国に遊び、菩薩の行を修して十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覚を取らじと。・

(教行信証 行 195頁)

仏願力によるがゆゑに、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。常倫に超出し、諸地の行現前するをもつてのゆゑに、このゆゑにすみやかなることを得る三つの証なり。これをもつて他力を推するに増上縁とす。しからざることを得んやと。・

(教行信証 行 195頁)

また次に『無量寿経』(上)のなかに、阿弥陀如来の本願(第二十二願)にのたまはく、
「たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して究竟じて
かならず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被
て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如
來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出
し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覚を取らじ」と。

(教行信証 証 286頁)

聖言、あきらかに知んぬ。大慈大悲の弘誓、廣大難思の利益、いまし煩惱の稠林に入り
て諸有を開導し、すなはち普賢の徳に遵ひて群生を悲引す。

(文類聚鈔 408頁)

安樂無量の菩薩

一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ

穢国にかならず化するなれ・

(浄土和讃 480頁)

還相の回向ととくことは

利他教化の果をえしめ

すなはち諸有に回入して

普賢の徳を修するなり・

(高僧和讃 曇鸞和尚 492頁)

その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を
度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生
を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除かんと。常倫に超出し、諸地の行現前し、普
賢の徳を修習せん。もししからずは、正覚を取らじ」と。文 この悲願は、如来の還相回
向の御ちかひなり。・
(三経往生 470頁)

これを真如実相を証すとも申す、無為法身ともいふ、滅度に至るともいふ、法性の常樂
を証すとも申すなり。このさとりをうれば、すなはち大慈大悲きはまりて生死海にかへり
入りてよろずの有情をたすくるを普賢の徳に帰せしむと申す。この利益におもむくを「來」
といふ、これを法性のみやこへかへると申すなり。(唯信鈔文意 549頁)

浄土和讃の普賢の徳に、親鸞聖人自らの左訓があります。

「われらしゆじよう、くらくにまいりなば、だいだいひをおこして、十方にいたりて、
しゆじようをりやくするなり、佛のしごくのじひを、ふげんとまふすなり」
と、申されています。

三帖和讃講義 柏原祐義は、

普賢の徳 普賢とは梵語の三曼多跋陀囉 (サンマンタバダラ) [s : Samantabhadra] の訳で、普遍賢善の義である。徳の法界にあまねきを普といひ、善を行うことを賢という。これに三通りある。(1)人普賢とは普賢菩薩のこと。(2)解普賢とは、普賢菩薩のような智解のことで、小乗教から大乘教へ進み入る智慧を指し。(3)行普賢とは、普賢菩薩のように衆生を済度する慈悲の行のことである。今ここでは、この行普賢のことで、安樂浄土の菩薩が衆生を教化したまふ行をば、普賢の徳と申されたのである。と述べている。

普賢の徳に遵う。

遵う

①〔動詞〕したがう(したがふ)。道すじをたどって、沿っていく。「遵海而南」海に遵ひて南す」〔孟子・梁下〕

②〔動詞〕したがう(したがふ)。きまりや先例にしたがってその通りにする。また、ルールをはずれないで行う。《類義語》循・順。「遵法」法に遵ふ」「長遵凶父之業」長じて凶父の業に遵ふ」〔曹冏・秦論〕

③〔動詞〕ひきいる(ひきゐる)。一本にまとめて、はみ出ないようにする。《類義語》率。

(学研)

普賢の徳とは、普賢菩薩が衆生を済度する浄土の慈悲行です。すなわち、衆生化益の行徳です。「無量寿経」は、「普賢の徳」を第二十二願還相回向に説き、親鸞聖人も還相回向と捉えています。「法華経」は、法華経を信ずる人を護る。

梵文の「無量寿経」には、普賢の徳の文はありません。

普賢の徳が何故漢訳になって現れるのか。大乘仏教は、惟越致地(退転する。元に戻る)から阿惟越致地(不退転)へ進むことが、菩薩の道であり、それには努力に努力を重ねて行わなければならない道であると説きます。普賢の徳は、『梵文 華嚴経』にはありませんが、梵文にはアミダーバ(無量光)の仏名があります。阿弥陀仏は、『華嚴経』において、憊弱怯劣の菩薩が阿惟越致地(不退転)に至る仏として説かれています。

金子先生は、大乘仏教は称名念仏ともいえる、と記しています。釈尊が亡くなり、大乘仏教の教義が生まれるまでの歴史と経緯があります。約300年のインドの歴史、インドの人びとが生きるための教えとして変化した、釈尊の教えを考える必要があります。

華嚴経

けごんぎょう

[s : Buddh vata saka n ma mah vaipulya s tra]

サンスクリット原

語の意味は、(仏の飾りと名づけられる広大な経)。漢訳では大方広仏華嚴経、略して華嚴経という。華嚴経から日本人の心に浮ぶのは、奈良の大仏、東海道五十三次、華嚴の滝などであろう。奈良の大仏は「毘盧遮那仏(びるし

やなぶつ)で、華嚴経や梵網経の本仏である。聖武天皇の発願によって建立されたもので、これらの経典にもとづいている。サンスクリット原語では *Vairocana Buddha* といい、(光の仏) (太陽の輝きの仏) の意味である。真言宗の經典である大日経の本仏、大日如来は、毘盧遮那仏ともいい、同じ仏である。ところで聖武天皇は、大仏のある東大寺を総国分寺とし、全国各地に国分僧寺・国分尼寺を建てて日本全体を毘盧遮那仏の国にしようとした。華嚴の世界観がわが国でもっとも高揚した時期であろう。(岩波)

普賢菩薩

ふげんぼさつ [s : Samantabhadra] 「文殊菩薩(もんじゆぼさつ)とともに」釈迦如来(しやくかによらい)の一生「補処(いっしよふしよ)の菩薩として」脇侍(きようじ)に配される。また「法華経では同経を深く信奉するもののために白象に乗った普賢菩薩が現れ守護すると説き、華嚴経はこの菩薩を讃嘆し、善財童子が50余人の善知識を訪れたのちに普賢菩薩を訪れて求道を全うしたことを説く。これらの経文に従って造形されたものに普賢菩薩来儀像(平安後期、東京国立博物館蔵)や善財童子歴参図(通称「華嚴五十五所絵巻、平安後期、東大寺蔵)の一齣などがある。また密教では、胎蔵「現圖曼荼羅(たいざうげんずまんだら)の「中台八葉院(ちゆうだいはちよういん)の東南隅に配されるほか、普賢菩薩の密教像としては「金剛薩(こんごうさつ)があり、さらにこれを「延命法の本尊としたものに「普賢延命菩薩がある。(岩波)

普賢 ぶげん

普醒の一。サンスクリットのサマンタバドラ Samantabhadra の訳。あまねく一切処に現れて賢者の功德を示すことからこの名がある。《華嚴経》には十大願(諸仏を敬わん、などをたてたこと(普賢行願品)、善財童子に自らの過去の修行を述べて彼を激励したこと(入法界品)が述べられ、《法華経》では六牙の白象に乗って法華経の信仰者を守護しにやってくる(普賢勸発品)が述べられている。十大願はいつさいの普醒の行願を代表するとされ、この意味で行徳の本体とされる彼は、仏の知恵をつかさどる文殊と行動をとにもすることが多く、ともに釈尊の脇侍となる。また密教經典には延命の徳も説かれている。中国のクムトウラ石窟、敦煌莫高窟にも白象に乗る普賢の図が描かれている。

定方里

「図像」 《法華経》に普賢普醒が《法華経》を誦持する行者を守護すると説かれ、また《法華経》が女人往生を説くことから、日本では平安時代にことに女性の信仰を集め、すぐれた美術作品を残した。絵画としては東京国立博物館本、鳥取豊乗寺本などがある。白象に乗って出現した幻想的な情景を描いた図で、12世紀の耽美的な仏画として著名である。さらに十羅刹女と組み合わせ普賢十羅刹女図として描いた作例も多い。彫刻では大倉文化財団所蔵の像が平安時代騎象普賢像としてよく知られている。密教では金剛醒凱(こんごうさつ)と同体とされ、胎蔵曼荼羅中台八葉院・文殊院、さらに金剛界曼荼羅中に見いだされ

る。またさまざまな画像の変化がある。しかし密教像として単独に作られた例は少なく、むしろ普賢延命法の本尊である普賢延命像が多い。増益・長寿のために修される。胎蔵曼荼羅遍知院の二十臂像があり、五仏宝冠をつけ、蓮華座に結跏趺坐する。異形像として蓮華座を四白象が支え、各象の頭に四天王を載せる図像がある。この例としては広島持光寺本がある。他方、二臂像として五仏宝冠をつけ、金剛杵・金剛鈴を執り、白象の背に座し、さらにこの白象を下で千体の白象が支える図像がある。この作例に京都松尾寺本がある。

百橋 明穂

(世界)

(C) 1998-2000 Hitachi Systems & Services, Ltd. All rights reserved.

善財童子 ぜんざいどうじ

《華嚴經》入法界品の主人公。サンスクリット名はスダナ Sudhana。母の胎に宿ったとき、財宝が家中に満ちたことから名づけられたという。福城(ダーニヤーカー)の豪商の子で、福城の東、莊嚴幢娑羅林(しょうこんどうざらりん)で文珠(マンジュシュリー)(菩薩の説法を聞いて仏道を求める心を発し、その指導によって南方に53人(数え方によって54人とも55人ともされる)の善知識(よい指導者)を訪ねて遍歴し、再び文珠のもとに戻り、最後に普賢(サマンタパドラ)菩薩の教えによって修行を完成する。善知識は菩薩、比丘、比丘尼、優婆塞(うばそく)(在家男子)、優婆夷(うはい)(在家女子)、神、婆羅門、王、童子、遊女などあらゆる階層にわたり、あらゆるものが求道の師であることを教えている。最後の普賢が説いた立場は普賢行(ふげんぎょう)とよばれ、一切衆生の救済を求めて永遠の活動を続けようというもの(十大願)である。善財童子は修行者の理想とされ、後の仏教化に大きな影響を与えた。中国にも敦煌壁画の華嚴变相図の中に見られるものなど善財の遍歴を画像化したものが見られるが、日本では高弁(明恵上人)による善財童子の讚陸(さんりく)が有名であり、また東大寺には《華嚴五十五所絵巻》《華嚴海会善知識曼荼羅図》などが現存する。東海道五十三次もこの話にもとづいて制定されたともいわれる。

末木 文美士

(世界)

(C) 1998-2000 Hitachi Systems & Services, Ltd. All rights reserved.

易行品白文

<https://ja.wikisource.org/wiki/%E6%98%93%E8%A1%8C%E5%93%81>

易行品書き下し文

[http://labo.wikidharma.org/index.php/%E5%8D%81%E4%BD%8F%E6%AF%98%E5%A9%86%E6%B2%99%E8%AB%96_\(%E4%B8%83%E7%A5%96\)](http://labo.wikidharma.org/index.php/%E5%8D%81%E4%BD%8F%E6%AF%98%E5%A9%86%E6%B2%99%E8%AB%96_(%E4%B8%83%E7%A5%96))

易行品現代語訳

http://www.yamadara.info/seiten/digyobon_j.htm

(仏教語)	仏教語大辞典	中村 元
(大漢和)	大漢和辞典	諸橋轍次
(岩波)	岩波仏教辞典	デジタル版
(総合)	総合仏教辞典	法蔵館
(広辞苑)	広辞苑 第五版	デジタル版
(世界)	世界大百科事典	平凡社 デジタル版 二版
(ウィキアーク)	ウィキアーク	
(哲学事典)	哲学事典	平凡社

十住毘婆沙論 卷第五

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

易行品 第九

難易二道

問曰 是阿惟越致菩薩初事如先説 至阿惟越致地者 行諸難行久乃可得 或墮聲聞辟支佛地 若爾者是大衰患 如助道法中説

【一】 問ひていはく、この阿惟越致の菩薩の初事は先に説くがごとし。阿惟越致地に至るには、もろもろの難行を行じ、久しくしてすなはち得べし。あるいは声聞・辟支佛地に墮す。もししからばこれ大衰患なり。『助道法』のなかに説くがごとし。

【二】 問うていう。この阿惟越致菩薩が初地に入るまでの修行のありさまは、さき(阿惟越致相品)に説いた通りである。阿惟越致に至るについては、多くの難行を行じ、久しい間かかってようやくこれを得ることができるので、あるいは声聞・縁覚の地位に退墮することがある。もしそうなれば、これは大きな損失であり、災

患である。助道法の中に説く通りである。

阿惟越致

あゆいおうち S: avaiartya S: avaiartika S: avaiartaniya などの音写。もはや退くことのない位。退かなる位。不退転 (仏教語)

菩薩

ぼさつ【菩薩】P: bodhi-satta S: bodhi-satva の音写。覺有情・大心衆生・大士・高士・開士などと漢訳する。菩薩は菩提薩埵(菩提薩多とも書く)の略であるとシナでは解するが、おそらくシナに伝わる際、俗語で P: bod-sai といったのを菩薩と音写したらしい。①さとり of 成就を欲する人。さとの完成に努力する人。さとりを求めて修行する者。仏となろうと志す者。ブツダとなるべく道心を起こして修行する求道者。仏の智慧を得るために修行している人。さとりを求める人。未来の仏。求道者。すぐれた修業者。後に大乘仏教の解釈によると、声聞と対比されてそこに利他的意義を含め、大乘の修行者をいう。自ら仏道を求め、他人を救済し、さとらせる者。上に向かっては菩提を求め、下に向かっては衆生を教化しようとする人。向上的には自利の行としてさとり(菩提、道)を体得し、向下的には利他の行として衆生を利益する者。大乘では在家・出家に通じ、発心して仏道を行ずる者をいう。また、さとりを得てすでに仏となりうるのに、あえて迷いの境にとどまり、人びとの救済のために活動する者。

(仏教語)

菩提

ほだい【菩提】Ps:bodhi の音写。智・道・覺と漢訳する。①仏の正覺の智。さとり。正智のはたらき。さとの智慧。迷いから目覚めること。智慧のはたらきによって無明がなくなった状態。『理趣經』(大)八卷七八四中『『理趣經』を讀論するときは「ほてい」とよむ。』『臨濟録』(大)四七卷四九七下『『要集』一四五、一五七、二一四、四五七、四九一』②法性を覺する智のこと。『瑜伽論』二卷(大)三〇卷二八四中『③崇高な開悟。智慧のあらわれ。』『宝性論』(大)三一卷八二一上』④菩提道場の略。さとりを開いた場所。『五教章』下四ノ五ハオ』S:bodhi-maṇḍa ⑤煩惱を断して得たニルヴァーナをいう。さとの境地。人間の完成。「解釈例」云何んが菩提なるや。謂ばく如実に自心を知るなり。『大日經』住心品(大)一八卷一下』菩提者漢言大道也。『教行信証』化身土卷(大)八三卷六四一下』⑥ニルヴァーナに至る因としての道をいう。俗に仏道の意に用いる。『反故集』「凡夫、初めて菩提を修する事・・・」⑦俗に冥福の意に用いる。『灌頂經』一二卷(大)二二卷五三二下』S:bodhi 、『中論』二四・三二』

(仏教語)

初事(初地)

菩薩の五十二位のうちの十地の第一をいう。歡喜地に同じ (仏教語)

歓喜地

歓喜を得る位ということ。菩薩がわずかにさとり境地に到達して歓喜する位。菩薩の階位十地のうちの初地。カマラシーラ (S: Kamalāsīla) の説明によると「菩薩はいまだ認識しなかったことを、この状態で認識するので大いに喜ぶ。そのゆえに(この地は) 歓喜といわれるのである」という。菩薩の階級に五十二位あるうち、第四十一位に当たる。聖者の初位。

(仏教語)

声聞

しようもん【聲聞】①教えを聞く修行僧。(P: śāvaka S: śrāvaka)。仏の教えを聞いて、そのとおりに忠実に実行する弟子。もと原始仏教聖典で (P: śāvaka) とは出家でも在家でも、教えを聞く人の意味であり、仏弟子を意味した。シャイナ教聖典でも同様である。(Pr:śāvaka) は在俗信者をも含めていた。後代になると、仏教では、教団を構成している出家修行僧のことのみをいうようになった。(これに対してシャイナ教では後には (S: śāvaka) という和在俗信者のことのみを意味するようになった。仏の教えの声を聞いて修行する人。自分のさとりしか考えない聖者。自己の完成だけを求め励む出家。自己のさとりだけを求めることに専念する聖者。自己の完成にのみ努める出家僧。教えを聞くのみの修業者。教えの声を聞いてはじめて修行しうる弟子。仏の教えを聞き、無限に長い時間をかけて修行した結果、阿羅漢の位に到達する。四向四果の聖者。修行において、四諦を観ずることを主要なるものとしている。大乘仏教では、声聞を独覚と並べて、これを二乗・小乗として貶めめる。(仏教語)

辟支仏

びやくしぶつ【辟支佛】P: pacceka-buddha S: pratyeka-buddha の音写。原義は「孤独なるブツダ」の意。①独覚・縁覚と漢訳する。ひとり修行する人。無常を観ずる。もと世俗のわずらいを離れ、山林にあって、ひとりで修行していた修行者を、仏教興起時代に P: pacceka-buddha とよんでいた。ジャイナ教でも、ひとりて修行する人のことをアルタマーガディー語で patteya-buddha とよんでいた。この理想が仏教にも継承されたらしく、最初期の仏典(『スッタニパータ』など)に出てくる修行者たちは、この類型の人びとである。「後代になると、精舎で集団生活をする修行僧たちも現れ、それらは声聞(P: śāvaka) とよばれ、辟支仏とは別の類型を示すものとなった。」伝統的な解釈によると、辟支仏とは、無仏の世に出て、性寂静を好み、師友なく、飛花落葉を感じてさとりを得る者をいう。師から教えを受けることなく、自分ひとりて真理をさとり、その体験を人に説こうとしない聖者。ひとりてさとりた人。独善的にさとり人。さとりの内容をひとり楽しむ仏。自らさとり者。自らさとりを開きながら、教えを垂れようとしない仏。独覚ともいう。師匠がなくて自分ひとりて修行し、さとりを得た者。大乘仏教の興起した時代になると、声聞・縁覚とともに三乗の一つとなった。二種の辟支仏については『大智度論』参照

②シナ・日本の仏教の一般の解釈によると、自らさとりて生死の苦海を解

脱して修行者の究極の境地(阿羅漢果)を証し、しかも説法せず教団を組織せず、ただ信者のために神通を示現するだけの聖人。無仏の世界に世に現れ、師友によらず自然に独悟する聖者であるから、独覚とよぶ。菩薩を上根、声聞を下根とすれば、これば中根の人である。要するに、消極的なさとりを求める小乗の修行者。十二因縁をその観法とする。〔『頭戒論』中(大)七四卷六〇五中〕〔『十住心論』五卷(大)七七卷(大)三三四中〕〔『往生要集』(大)八四卷三六中、四一中、五九上〕〔『今昔物語』一卷第二二、五卷第五〕〔『興禅護国論』上〕〔『正法眼蔵』行持、供養諸仏(大)八二卷三八上、二八六上〕 *S:pratyeka-buddha* は、また縁覚と漢訳されることもある。シナでの解釈によると、十二因縁を觀し、あるいは他の縁によつてさとしたので、縁覚という(『正法華』など)。この訳語について、『大乘義章』(第一七卷)には、「因縁を覚るゆえに」と解説されている。しかしこの訳語ば、おそらく後代の解釈をもちこんだものと思われる。」(天台宗では「ひやくしふつ」とよめというが、根拠不明。) (仏教語)

ひやくしふつ・[S: *pratyeka-buddha*] サンスクリット原語あるいはその俗語形から(辟支仏(びやくしふつ)とも音写される。〈独覚〉とも漢訳されるように、師なくして独自にさとりを開いた人をいい、仏教のみならずジャイナ教でもこの名称を用いる。十二因縁を觀じて理法をさとり、あるいはさまざまな外縁によつてさとるゆえに縁覚という。独覚は、仲間をつくつて修行する部行独覚と、麒麟の一角の如く独りで道を得る麟角喩独覚とに分ける。大乗仏教ではこの立場を自己中心的なものと考え、声聞(しようもん)とともに二乗と称する。三根の差別に随つて、三種の菩提を出す。いはく、声聞の菩提、縁覚の菩提、諸仏の菩提〔摧邪輪(上)〕 (岩波)

助道 じょどう さとりを得るための助け。かたわらの道。わき道。補いとなつている修業道。 (仏教語)

助道法 じょどうほう 正しい見方・あり方を助ける修業の方法。〔華嚴經一卷(大)九卷三九六中〕 (仏教語)

若隨聲聞地 及辟支佛地 是名菩薩死 則失一切利 若墮於地獄 不生如是畏

「もし声聞地、および辟支仏地に墮するは、これを菩薩の死と名づく。すなはち一切の利を失す。もし地獄に墮するも、かくのごとき畏れを生ぜず。

もし声聞の地位や 縁覚の地位に墮ちるならば
これを菩薩の死と名づける そうなれば一切の利益を失う

たとい地獄に堕ちても かような畏れを生じないが

地獄

じごく【地獄】地下にある牢獄の意。苦しみのきわまった世界。現世に悪業をなした者が、死後その報いを受ける所。罪業の結果として報われた生存状態、および環境。三悪道・五趣・六道・十界の一つ。経論によつて種々に説かれるが、無間・八熱(八大)・八寒・孤独などの地獄があり、八大または八寒地獄の一つ一つには、十六小地獄(十六遊増地獄)があり、みな閻浮提の下、二万(または三万二千)由旬の所にあるといわれる。黒沙・沸尿・鉄釘・饑餓・渴・一銅鑊・多銅鑊・石磨・膿血・量火・灰河・鉄丸・鉞斧・豺狼・劍樹・寒水の各地獄で、この中で筆舌に尽くせない苦しみを受けるという。

(仏教語)

畏れ

おそれ【恐れ・畏れ・虞】おそれること。恐怖。「ーを抱く」よくないことが起こるのではないかという心配。気づかい。不安。「失敗するーがある」「大雨のー」かしこまること。敬意。平治物語(金刀比羅本)「君を後になしまゐらせむがーなれば」◇一般には「恐」。ーには「虞」も、ーには「畏」も使う。

(広辞苑)

仏果

ぶつか【佛果】仏因の対。仏道修行の結果、達せられた仏の位のこと。仏という究極の結果。結果として仏となった状態。さとり。

(仏教語)

閻浮提

えんぶだい【閻浮提】S: Jambu-dvīpa s: ħambū-dvīpa の音写。①須弥山の南方にある大陸。四大洲の一つ。須弥山を中心に人間世界を東西南北の四洲に分ち、閻浮提は南洲であり、インドなどは閻浮提に属すとされる。十六の大国・五百の中国・十万の小国がある。ここで住民が受ける楽しみは東と北との二洲には劣るが、諸仏が現れるのはこの南の洲だけであるという。北に広く、南に狭い地形で、縦横七千ヨージュヤナあるといわれ、もとはインドの地をさしていったものだが、後にはこの人間世界をいうようになった。現実の人間界。この世。われわれの住んでいる世界。この地上世界。わたしたちの世界。陸上。娑婆世界。

(仏教語)

饑餓

きが【飢餓・饑餓】うえること。うえ。一時的・地域的現象である飢饉ききんと対比して、永続的・慢性的な食糧不足や低栄養状態にいう場合もある

(岩波)

豺狼

さいーろう【豺狼】：ラウ|やまいぬとおおかみ。貪欲残酷な獣。|残酷で貪欲な人、極悪無慈悲な人のたとえ。|

(岩波)

若隳二乗地 則爲大怖畏

隳於地獄中 畢竟得至佛

若隳二乗地 畢竟遮佛道

もし二乗地に墮すれば、すなはち大怖畏となす。
地獄のなかに墮するも、仏に至ることを得。
もし二乗地に墮すれば、畢竟じて仏道を遮す。

もし二乗の地位に墮ちるならば すなわち大きな畏れとなる
なんとなれば地獄の中に墮ちても ついには仏果に至ることはできるが
もし二乗の地位に墮ちるならば ついに仏になる道をさまたげるからである

二乗

にじょう ①声聞乗と縁覚乗の二つをいう。乗は、乗り物の意。声聞とは、師の教えによってさとる人で、仏の教えを直接聞き、四諦の道理によってさとる人たち、およびその立場をいう。縁覚とは、理法を体得して自らさとる人で、仏の教えによらず、ひとりで十二因縁の道理を観察してさとる人たち、およびその立場をいう。大乘の立場からいえば、この二乗の人たち、およびその立場は自己の完成にとどまって、多くの他人の救済に向かわないから、劣った立場(劣乗・小乗)であるとみるのである。小乗仏教における聖者。たとえ仏道に入っても、その形式的な面にとらわれすぎたり、自分のさとり、自分の問題のことだけしか考えていないような人びと。自分だけのさとりに満足して、他人救済の慈悲活動を忘れた者。

(仏教語)

四諦

したい ①四つの真理。四つの聖なる真理。仏教の説く四種の基本真理。苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つ。四聖諦に同じ。 ②智顛は『勝鬘經』ならびに南本『涅槃經』四行品の説意によって、生滅・無生・無量・無作の四種の四諦の説を立てて、これを化法の四教に配している。「しかし『勝鬘經』の法身章(第八)には二種の四諦を説くのみである。」(仏教語)

四諦 したい [s : catu-rya-satya] 諦(satya)とは真理のこと、四つの真理で、苦諦(くたい)・集諦(じつたい)・滅諦(めつたい)・道諦(どうたい)の総称。(四聖諦(ししようたい)ともいう。釈尊(しやくそん)が鹿野苑(ろくやおん)における最初の説法(初転法輪(しよてんぼうりん))において説いたとされる、仏教の根本教説。(苦諦)は、迷いの生存は苦であるという真理。(集諦)は、欲望の尽きないことが苦を生起させているという真理。(滅諦)は、欲望のなくなった状態が苦滅の理想の境地であるという真理。(道諦)は、苦滅にいたるためには八つの正しい修行方法(八正道)はつしようどう)によらなければならないという真理。四諦の教えは、しばしば治病原理になぞらえられる。すなわち、苦諦は病状を知ること。集諦は病因を知ること。滅諦は回復すべき健康状態のことであり、道諦は良薬であるとされる。(岩波)

畢竟

ひっーきょう【畢竟】：キヤウ(「畢」も「竟」も終る意)つまるところ。

つまり。所詮。結局。

(広辞苑)

遮

さえぎる とどめる 横ざまにたちきる

(仏教語)

佛自於經中 解説如是事

如人貪壽者 斬首則大畏

菩薩亦如是 若於聲聞地

仏みづから『経』（清浄毘尼方広経）のなかにおいて、かくのごとき事を解説したまふ。

人の寿を貪るもの、首を斬らんとすればすなはち大きに畏るるがごとく、菩薩もまたかくのごとし。もし声聞地、と。

仏みづから経の中に こういうことを説かれてある

寿命を惜しむような人は 首を斬られることを大いに畏れる

菩薩もまたこの通り もし声聞の地位や

清浄毘尼方広経 国訳一切経 律部 一二巻 (大)二四巻 一四八九

及辟支佛地 應生大怖畏

および辟支仏地においては、大怖畏を生ずべし」

縁覚の地位に墮ちるならば 大きな畏れを生ずるであろう

是故若諸佛所説有易行道疾得至阿惟越致地方便者 願爲説之

答曰 如汝所説是憊弱怯劣無有大心 非是丈夫志幹之言也 何以故 若人發願欲求阿耨多羅三藐三菩提 未得阿惟越致 於其中間應不惜身命 晝夜精進如救頭燃 如助道中説

このゆゑに、もし諸仏の所説に、易行道にして疾く阿惟越致地に至ることを得る方便あらば、願はくはためにこれを説きたまへと。

【2】 答へていはく、なんぢが所説のごときは、これ憊弱怯劣にして大心あることなし。これ丈夫志幹の言にあらず。なにをもつてのゆゑに。もし人願を發して阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲して、いまだ阿惟越致を得ずは、その中間において身命を惜しまず、昼夜精進して頭燃を救ふがごとくすべし。『助道』のなかに説くがごとし。

こういうわけであるから、もし諸仏の説きたもう中に、易行道どうですみやかに不

退の地位に至ることのできる方法があるならば、どうか、わたしのためにこれを説かれよ。

【2】答えていう。そなたのいうようなことは、根機の劣った弱い者のいうことで大きな志ではなく、これは雄々しく堅固な志を持つ者のことではない。なぜかという、もし人が願いを起こし無上仏果を求めようと欲して、まだ不退の位を得ないならば、その間は身命を惜しまず昼夜精進して、頭に付いた火を払い消すようにせねばならぬ。《助道》の中に説くとおりである。

易行道

いぎようどう 行きやすい道。だれでも容易に行うことができるのでこのようにゆう。ただひとえに仏を信ずるといふ容易な修業。他力によって淨土に往生しようとする法門。難行道の対。

(仏教語)

儻弱怯劣

にようにやくこうれつ 根機(素質能力)の劣った弱々しい者。

(仏教語)

阿耨多羅三藐三菩提

あのかたらさんみやくさんぼだい P: anuttarā samṃā-sambodhi

S: anuttarā samyak-sambodhi の音写。略して阿耨三菩提・阿耨菩提ともいう。無上正等(または等正)覚・無上正真道・無上正遍知・無上正偏智と漢訳する。仏のさとの智慧のこと、この上なくすぐれ、正しく平等円満である意。仏の最上絶対完全な智。SP: anuttara は無上の、S: samyak は正しい、完全な、PS: sambodhi は、さとりの、という意である。仏の目覚めた境地を表すことば。世に並ぶものもない、すぐれた正しいさとり。この上ない正しい目覚め。完全なさとり。無上の正しいさとり(仏のさとりをさしている)。(仏教語)

- 22 -

菩薩未得至 阿惟越致地

應常勤精進 猶如救頭燃

荷負於重担 爲求菩提故

「菩薩いまだ阿惟越致地に至ることを得ずは、つねに勤精進して、なほ頭燃を救ひ、重担を荷負するがごとくすべし。菩提を求むるためのゆゑに、

菩薩がまだ不退の位に 至ることができない間は
いつも勤め励んで ちようど頭の火を払うようにせねばならぬ
重い任務を負うて 仏果を求めるのであるから

常應勤精進 不生懈怠心

若求聲聞乘 辟支佛乘者

但爲成己利 常應勤精進

つねに勤精進して、懈怠の心を生ぜざるべし。

声聞乘・辟支仏乘を求むるものごときは、ただおのが利を成ぜんがためにするも、つねに勤精進すべし。

常に勤め励んで 懈怠の心を起こしてはならぬ

声聞や縁覚の果を 求めるような者は

ただ自己の利を成就するためにさえ いつも勤め励まねばならぬ

何況於菩薩 自度亦度彼

於此二乘人 億倍應精進

いかにいはんや菩薩のみづから度し、またかれを度せんとするにおいてをや。この二乗の人よりも、億倍して精進すべし」と。

まして菩提を求めて みずからさとり人をも濟度するためには

この二乗の人よりも 億倍して精進せねばならぬ

度

① 渡す、の意。無常と苦の此岸から、常住であり、楽である彼岸へ渡すこと。

迷いの此岸から、さとりの彼岸に渡し救うこと。さとりの世界、仏の世界へ導き入れること。導くこと。救い。教化。

② 波羅蜜に同じ。③ 得度のこと。
(仏教語)

行大乘者佛如是説 發願求佛道 重於擧三千大千世界 汝言阿惟越致地是法甚難久乃可得 若有易行道疾得至阿惟越致地者 是乃怯弱下劣之言 非是大人志幹之説 汝若必欲聞此方便今當説之 佛法有無量門 如世間道有難有易 陸道步行則苦 水道乘船則樂 菩薩道亦如是 或有勤行精進 或有以信方便易行疾至阿惟越致者

大乘を行ずるものには、仏かくのごとく説きたまへり。「願を發して仏道を求むるは三千大千世界を擧ぐるよりも重し」と。なんぢ、阿惟越致地はこの法はなはだ難し。久しくしてすなはち得べし。

もし易行道にして疾く阿惟越致地に至ることを得るありやといふは、これすなはち怯弱下劣の言なり。これ大人志幹の説にあらず。なんぢ、もしかならずこの方便を聞かんと欲せば、いままさにこれを説くべし。

【3】 仏法に無量の門あり。世間の道に難あり易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなはち樂しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便易行をもつて疾く阿惟越致に至るものあり。

大乘を行ずる者には、仏は次のように説かれてある。「發願して仏果を求めること は三千大千世界をもち擧げるよりも重い」と。そなたが不退の位を得る法は甚はな はだむずかしく、久しい間かかってようやく得ることが出来る。もしすみやかに不

退の位に至ることのできる易行の道があるのかというならば、これはすなわち根機の劣った弱い者の言葉で、すぐれた人、堅固な志を持つ者のいうことではない。

しかしながら、そなたが、もし必ずこの方法を聞きたいと思うならば、今まさにこれを説くであろう。

【3】 仏法には量り知れない多くの門戸がある。たとえば世間の道路に難しい道と易しい道とがあつて、陸路を歩いて行くのは苦しいが、水路を船に乗って渡るのは楽しいようなものである。菩薩の道もまたそのようである。あるいはいろいろな行を積んで行くものもあり、あるいは信方便の易行をもって速すみやかに不退転の位に至るものもある。

十方十仏章

如偈説

【4】 偈に説くがごとし。

【4】 偈げをもつて説く通りである。

東方善徳佛 南梅檀徳佛 西無量明佛 北方相徳佛 東南無憂徳 西南寶施佛

東方善徳仏、南梅檀徳仏、
西無量明仏、北方相徳仏、
東南無憂徳、西南宝施仏、

東方の善徳仏 南方の梅檀徳仏
西方の無量明仏 北方の相徳仏
東南の無憂徳仏 西南の宝施仏

西北華徳佛 東北三行佛 下方明徳佛 上方廣衆徳 如是諸世尊 今現在十方

西北華徳仏、東北三行仏、
下方明徳仏、上方広衆徳、
かくのごときもろもろの世尊、いま現に十方にまします。

西北の華徳仏 東北の三乗行仏
下方の明徳仏 上方の広衆徳仏
これらの仏たちは いま現に十方におられる

若人疾欲至 不退轉地者

應以恭敬心 執持稱名號

もし人疾く不退轉地に至らんと欲せば、
恭敬心をもつて、執持して名号を称すべしと。

もし人がすみやかに 不退の位に至ろうと思うなら
よろしく恭敬の心をもつて 仏の名号を信じて称とすべきである

若菩薩欲於此身得至阿惟越致地成就阿耨多羅三藐三菩提者 應當念是十方諸佛稱其名號如
寶月童子所問經阿惟越致品中說

【5】もし菩薩の身において阿惟越致地に至ることを得て、阿耨多羅三藐三菩提を
成就せんと欲せば、まさにこの十方諸佛を念じ、その名号を称すべし。『宝月童子
所問經』の「阿惟越致品」のなかに説きたまふがごとし。

【5】もし菩薩がこの身において不退轉の地位に至り、ついに無上の仏果を成就し
ようと思うならば、よろしくこの十方の仏たちを信じてその名号を称すべきである。
※宝月童子所問經の阿惟越致品の中に説かれている通りである。

宝月童子所問經 ほうがつどうじしよもんぎょう 現存しない。同經を抄訳したと思われる
るものに『大乘宝月童子問法經』一卷(北宋の施護訳)がある。(行巻 P.152)
引用に該当する文は、現存する『大乘宝月童子問法經』(宋の施護訳)に
はないが、チベット訳にほぼ相応する文がある。(仏教語)

佛告寶月 東方去此過無量無邊不可思議恒河沙等佛土有世界名無憂 其地平坦七寶合成 紫
磨金縷交絡其界 寶樹羅列以爲莊嚴 無有地獄畜生餓鬼阿修羅道及諸難處 清淨無穢無有沙
礫瓦石山陵堆阜深坑幽壑 天常雨華以布其地

「仏、宝月に告げたまはく、(東方)ここを去ること無量無辺不可思議恒河沙等の仏土を過
ぎて世界あり。無憂と名づく。その地平坦にして七宝をもつて合成し、紫磨金縷をもつて
その界に交絡せり。宝樹羅列して、もつて莊嚴となす。地獄・畜生・餓鬼・阿修羅道およ
びもろもろの難処あることなし。清淨にして穢れなく、沙礫・瓦石・山陵・堆阜・深坑・
幽壑あることなし。天よりつねに華を雨らして、もつてその地に布けり。

仏が宝月に告げたもう。東方ここを去ること無量無辺不可思議恒河沙の仏土を過ぎたところに、無憂と名づける世界がある。その地は、平坦であつて七宝でできており、紫磨金の糸筋で縦横に道の境を区切っている。宝樹がならんで莊嚴となり、地獄・畜生・餓鬼・阿修羅道およびいろいろの難処（八難など）がない。浄らかで穢けがれがなく、沙礫・瓦石・山陵・堆阜・深坑・幽壑たにがない。天より常に華を雨ふらしてその地に布しいている。

紫磨金

しまごん 紫磨黄金・紫金ともいう。紫色を帯びた金で、黄金の中の最高とされる。ときには經典の言語は、*Sivaraṇa*（金）のみであるので、閻浮壇金を念頭に紫は訳者が付けたものらしい。シナでは、金の精なるものを称した。

（仏教語）

難処

なんしよ 仏道修行の至難なところ。仏道修行の障害となるところ。八難処のことで、仏や物の教えに遇う機会がえられない八種のところ。

（仏教語）

八難

はちなん [s : asia aksana] 宗教的行為(梵行)を行ない得ない8種の境界（八難処）ともいう。1は地獄，2は畜生，3は餓鬼(以上の三悪道では苦しみのため)，4は長寿天，5は辺地(以上の2処にあつては樂に安住して法を求めない)，6は聾盲(感覺器官等の身体的な理由のため)，7は世智弁聰(世智にたけても邪見に陥る)，8は仏前仏後(仏の出世に巡り合わない)。

（岩波）

堆阜

たいふ 丘。

（仏教語）

幽壑

ゆうがく 深い谷間。

（仏教語）

時世有佛號曰善徳如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊 大菩薩衆恭敬圍繞 身相光色如燃大金山如大珍寶聚 爲諸大衆廣說正法 初中後善有辭有義 所說不雜具足清淨如實不失 何謂不失不失地水火風 不失欲界色界無色界 不失色受想行識

時に世に仏まします。号して善徳如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊といふ。

大菩薩衆恭敬し圍繞す。身相の光色大金山を燃やすがごとく、大珍宝聚のごとし。もろもろの大衆のために広く正法を説きたまふ。初・中・後よく辞あり義あり。所説雑はらず。具足し、清淨にして、如実にして失せず。なにをか失せずといふ。

地・水・火・風を失せず、欲界・色界・無色界を失せず、色・受・想・行・識を失せざるなり。

今その世界に仏がおられる。善徳如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と申しあげる。大菩薩衆が恭敬してとり囲んでいる。おすがたの色はかがやく大金山のようであり、珍しい宝の大きなあつまりのようである。多くの大衆のために広く正法を説きのべておられる。その初めも中も後もよくとのい、言葉は適切で、義理をきわめ、説かれるところは大乘ばかりで雑まじりけがなく、清浄の徳をそなえ、諸法のありのままにかなってあやまりがない。何故なげあやまりがないのかといえば、地・水・火・風をあやまらず、欲界・色界・無色界をあやまらず、色・受・想・行・識をあやまらず、それらの通りに説かれるからである。

十号

じゅうごう 〈仏十号〉(如来十号)ともいう。仏を指す10種の呼び名。1)「如来(によらい)」、2)「応供(おうぐ)」「阿羅漢(あらかん)」、3)「正遍知(しよへんち)」「あまねく正しく悟った人」、4)「明行足(みようぎようそく)」「智慧と行為を具えた人」、5)「善逝(ぜんぜい)」、6)「世間解(せけんげ)」「世間をよく知った人」、7)「無上士(むじようし)」「最高の人間」、8)「調御丈夫(じようごじようぶ)」「人を指導するに巧みな者」、9)「天人師(てんにんし)」「神々と人間たちの師」、10)「仏(ぶつ)」「(仏陀(ぶつだ))」、11)「世尊(せそん)」。実際には2)の称号があるので、これを10にするために、経典によって6)、7)あるいは7)、8)が一つにまとめられる。(岩波)

応供

おうぐ [s:arhat] 供養を受けるにふさわしい者の意。サンスクリット原語を音写して〈阿羅漢〉という。釈尊時代のインドにおいて、宗教的な最高の境地に達した聖者の呼称として用いられたもの。仏教でも如来の別号たる。十号の一つに数えられ、仏そのものを指したが、小乗仏教では如来(仏)とは区別され、如来の弟子たる声聞(しようもん)の最高位として位置づけられた。また四用といふは：四には自己用、羅漢は応供の徳備はり、自己の物を用ふるがごとし。「貞享版沙石集(4 3)」(仏教語)

正遍知

しようへんち 正しくあまねき智慧のある方。さとりを開いた人。等正覚に同じ。(仏教語)

明行足

みようぎようそく 明(智慧)と行(実践)とをぐそくした者の意。知と行とが完全な者。仏の十号の一つジャイナ教などで修業完成者のことをこのようによんでいたのが仏教に取り入れられた。S: sampanna とは「完全にそなわった」という意味であるらしい。(仏教語)

善逝

ぜんぜい [s:sugata] 原語の漢訳語で、修伽陀(しゆがだ)〈須伽陀(すがだ)〉など

と音写する。原意は〈よくゆきし人〉であり、幸福な人、完成した者、よく悟りに到達した人をも意味し、 仏のことを指称する。菩薩持地経(ぼさつじじきよう)には(涅槃(ねはん)に上昇し永く復た還らず、故に善逝と名づく)とある。仏の十号(じゅうごう)の第五号で、第一号の如来(にょらい)と対応して、彼岸(ひがん)と此岸(しがん)を自在に往き来できるといふ来往自在の徳の往の方面を表しているとも見ることが出来る。冥には十二神将、忝(かたじけなく)医王善逝の使者として凶賊追討の勇士にあひ加はり〔平家(7・返牒)〕

(仏教語)

世間解

せけんげ 世間をしれる人。世間を知悉(ちしつ) 知りつくすこと。詳しく知ること)する者。仏の十号の一つ。世間のすべてに通じている人。世間に住む生きもの、その他あらゆることがらを知り理解しているゆえに、一切衆生のそれぞれにふさわしい法を徳子とができる者。

(仏教語)

無上

むじょう [s:anuttara] この上なくすぐれた。それより上がないこと。(阿耨多羅(あのかたら)と音写される。(無上)という語は中国の古典では 管子 (宙合)などに用例がある。(無上正等覚(むじょうしとうがく)(無上正等覚・阿耨多羅三藐三菩提(さんみやくさんぼだい)はこの上なく正しいさと。無上道(むじょうどう)はこの上なくすぐれた道またはさと。無上甚深(むじょうじんじん)は、この上なくすぐれていて意味内容がきわめて深いこと(↓開経偈)。また、仏のことを無上士あるいは無上尊という。其の太子、世を厭ひて家を出でて、山に入りて六年苦行を修して、無上道を得給へりき〔今昔(6 1)〕 補処の弥勒におなじくして、無上覚をさとるなり〔正像末和讃〕

(岩波)

調御丈夫

じょうごじょうぶ【調御丈夫】人間の調御者。調馬師という語の「馬」を「人」に置きかえて、調人師としたのである。それが仏の称号となった。丈夫をもならすべき御者の意。人間の調教師。人びとを調える御者。荒くれ男を御する人。人を調御するに巧みな者。人生のよき教師。仏の十号の一つ。

(仏教語)

天人師

てんにんし【天人師】諸天と人びとの師。神々と人間の教師。仏の十号の一つ。人間界の人びとと天上界の神々を教え導く者。

(仏教語)

仏

ぶつ [s:buddha] 〈ブツダ〉すなわち〈目覚めた人〉(真理を悟った人(覚者))の意をあらわすサンスクリット語に対応する音写語。古くは(浮図(ふと))〈浮屠)とも音写され、後には(仏陀)などと音写された。ほとけ。もとはインド一般に、真理をさとった聖者を意味していた。仏教の歴史においては仏教の開祖シヤークヤムニ(釈迦牟尼、釈尊)をさすが、教理上は、悟りの普遍性の故に、広く修行者によって達成可能な目標とされる(とくに大乘仏教)。ただし帰依の対象としては三世十方の諸仏といい、凡夫や声聞(仏弟子)・縁覚などとはもちろん、菩薩とすらも絶対的にかげ離れた超越的存在として仰がれる。この意味の仏陀は(無上正等覚)

(阿耨多羅三藐三仏陀(あのかたらさんみやくさんぶつだ)と規定され、また、(如来)などの十号をもって称せられる。仏とは(自覚、覚他、覚行窮満)と説明されるが、(自覚)とは元来、釈尊の菩提樹下の悟りをさし、(覚他)(他を覚らせる)は鹿野苑(ろくやおん)での 初転法輪(しよてんぼうりん)以後、入滅に至るまでの教導をさす。前者は智慧の完成、後者は慈悲行の完成で、仏はこの智慧と慈悲の両面が完全であるので(覚行窮満)とされる。(仏教語)

世尊

せそん 主としてサンスクリット語bhagavatの漢訳語で、bhaga(幸運、繁栄)とvat(を有するもの)の結合したもの。(婆伽婆(ばがば・ばぎやば)(薄伽梵(はがぼん・ばぎやぼん)などと音写される。 福德ある者、聖なる者の意味で、古代インドでは師に対する呼びかけの言葉として用いられていた。 仏教においては 釈尊(しやくそん)を意味する語として用いられたが、神格化されるに伴い 仏の尊称となり、万徳を具し世に尊敬されるが故にこのように漢訳された。 仏の 十号の第十号で、 阿含経(あこんぎよう)、 成実論(じようじつろん) では他の九号を具える故に世尊であるといわれ、また 涅槃経(ねはんぎよう)、 大智度論(だいちどろん) では十号の外に置かれるなど、十号の総称として用いられた例もある。なおbhagavat以外にも仏を表すインド諸語が(世尊)と訳された場合もある。 なお、依自性(えじししよう)・清浄(ししようじよう)性・色麗(しきらい)性・名声(みしようしよう)・吉祥(きちじよう)・大威徳聚(だいいくじゆ)の6種の福分(bh. ga)がある(vat)からbhagavat(世尊)である、と解釈される。(仏教語)

金山

こんぜん ①しばしば仏身にたとえる。②須弥山をめぐる七重の金山。(仏教語)

四大

しだい【四大】①地・水・火・風の四大種のこと。大(S: mahābhūta)とは元素のこと。四つの元素。一切の物質を構成する四大元素。(1)堅さを本質として保持する作用をもつ地大(S: pṛthivī-dhātu)。(2)湿性をおさめ集める作用をもつ水大(S: ab-dhātu)。(3)熱さを本質として成熟させる作用のある火大(S: tejo-dhātu)。(4)動物を成長させる作用のある風大(S: vāyu-dhātu)をいう。これらが集まって物質を生ずると考えたから、能造の色という。この元素説にばインドの他の思想体系にも類似の説があり、仏教中ても異説があるが、アビダルマ仏教の一般説では認識対象としての地・水・火・風は仮の四大であり、元素としての実の四大は不可見のものである、とする。(仏教語)

三界

伝統的保守的仏教(いわゆる小乗)の体系化された教義によると、衆生の生存している生活環境を欲界(S: kāma-dhātu)、色界(S: rūpa-dhātu)、無色界(arūpya-dhātu)の三つ(三界)に分ける。すなわち、衆生が生まれて死に輪廻する領域として、三つの迷いの世界を考えた。

(1)欲界は、もつとも下にあり、姪欲・食欲の二つの欲を有する生きものの住む所である。欲のさかんな世界であって、この中には地獄・餓鬼・畜生・阿

修羅・人・天の六道(または六趣)があり、欲界の天(神々)を六欲天という。(2)色界は、欲界の上であり、姪欲と食欲とを離れた生きものの住む所である。ここは絶妙な物質(色)より成るので、色界という。欲を離れた清らかな世界である。

(3)無色界は、最上の領域で、物質を超えた世界である。精神のみが存在する。教義綱要書には、『(欲界)とは地獄(naraka)と餓鬼(tyāñcah.pl)と人間ども(manusyañ)と六欲天(sad. kasañ)』と(四)の生存領域(gati. 趣)である。「六欲天」とは六つの神々の集まり(deva-nikāyāh.pl)、『すなわち例示すると、四大王衆天と三十三天とヤーマ天とトウシタ天と化樂天と他化自在とのことであり、さらにかねらの住む自然世界(器世間)とともにそのように称するのである。』と(四)。

ところで欲界には二十の場所があるという。すなわち餓鬼・畜生のそれぞれ住む場所と、人間の住む四大洲と八種の地獄と六欲天とで二十になる。人間の住むところと畜生の住むところは交錯している

当時の仏教の神話的観念は美術作品のうちにも認められる。民衆は、宗教的には五趣(五つの住所・天上・人間・畜生・餓鬼・地獄界)にわたる輪廻を信じていたことが、アジャンターの壁画にあらわされている。また人間世界は「四洲」に分かれていると考えていた (仏教語)

ごうん 【五蘊】五つの集まり、五種の群れ、の意。蘊(S:skandha)は積集の意と解せられ、集まりをいう。①われわれの存在の五つの構成要素(の集合)。われわれの存在を含めて、あらゆる存在を五つの集まり(五蘊)の関係においてとらえる見方。物と心の集まり。物質と精神。五蘊とば、仏教で物質と精神とを五つに分類したものをいう。環境を含めての衆生の身心を五種に分析したもの。色・受・想・行・識の五つである。(1) 色(S:rūpa)は物質一般、あるいは身体。身体および物質。物質性。(2) 受(S:vedanā)は感受作用のことで、感覚・単純感情をいう。(3) 想(Saṃskāñā)は心に浮かぶ像で、表象作用のこと。(4) 行(S:samskāra)は意志、あるいは衝動的欲求に当たるべき心作用のこと。潜在的形成力。受・想以外の心作用一般をいうとも解せられる。五蘊説はあとで成立した。四蘊以外のものを引くくめて行蘊としたのである。だから行蘊の内容は数が不定である。(5) 識(S:vijñāna)は認識作用。識別作用。区別して知ること。また意識そのものをいう。心作用全般を総括する心の活動。大まかにいうと、物質性・感覚・表象・意志的形成力・認識作用の五つとでもいったらよいであろう。色は身体であり、受以下は心に関するものであり、合わせて身心をいう。われらの個人存在は、物質面(色)と精神面(他四つ)とからなり、この五つの集まり以外に独立の我はないと考える。〔『俱舍論』 (仏教語)

95. 泡沫

1. ある時、尊師はアヨージャーのガンジス川の岸边に滞在していた。
2. そこで、尊師は比丘たちに話しかけた。

【色形】

3. 比丘たちよ。たとえば、このガンジス川が大きな泡のかたまりをもたらすように、そのように眼（まなこ）ある人はこれを見て、静観し、正しく考察するだろう。彼が、それを見て、静観し、正しく考察するならば、それは、まったく虚ろなものであって、空虚であり、実質のないものに見えるであろう。比丘たちよ。それならば、どうして泡沫のかたまりに真実（精髓、サーラ）があるろうか。

4. このように、比丘たちよ、いかなる色形であれ、過去や未来や現在ののものであれ、うちであれ、外であれ、粗いものであれ、細かいものであれ、劣ったものであれ、すぐれたものであれ、遠くにあるうと近くにあるうと、彼はそれを見て、静観し正しく考察するならば、比丘たちよ、まったく虚ろであって、空虚であり、実質がないものに見えるであろう。それだから、どうして色形に真実（精髓、サーラ）があるろうか。

【感受作用】

5. 比丘たちよ、たとえば、秋の降雨の際に、水の上に泡が生じては消えるように、そのように眼ある人はこれを見て、静観し、正しく考察するだろう。彼がそれを見て、静観し、正しく考察するならば、それは、まったく虚ろなものであって、空虚であり、実質のないものに見えるであろう。それならば、どうして水の泡に真実（精髓、サーラ）があるだろうか。

6. このように、比丘たちよ、いかなる感受作用であれ、過去・未来・現在のものであれ、うちであれ、外であれ、粗いものであれ、細かいものであれ、劣ったものであれ、すぐれたものであれ、遠くにあるうと、近くにあるうと、比丘たちよ、彼はそれを見て、静観し、正しく考察するならば、まったく虚ろであって、空虚であって、実質のないものに見えるであろう。それならば、どうして感受作用に真実（精髓、サーラ）があるだろうか。

【表象作用】

7. 比丘たちよ、たとえば、夏の月の終わり頃に日中に立っていると、かげろうがゆらゆらするように、そのように眼ある人はそれを見て、静観し、正しく考察するだろう。彼がそれを見て静観し正しく考察するならば、それはまったく虚ろであって、空虚であり、実質のないものに見えるだろう。それ

ならば、どうしてかげろうに真実（精髓、サーラ）があるうか。

8. このように、比丘たちよ、いかなる表象作用であれ、過去や・未来・現在のものであれ、うちであれ、外であれ、粗いものであれ、細かいものであれ、劣っているものであれ、すぐれているものであれ、遠くであろうと近くであろうと、比丘たちよ、彼はそれを見て、静観し、正しく考察する。彼がそれを見て、静観し、正しく考察するならば、それはまったく虚ろであって、空虚であり、実質のないものに見えるであろう。それならば、どうして表象作用に真実（精髓、サーラ）があるうか。

【志向作用】

9. 比丘たちよ、たとえば、ある男が堅材（サーラ）を欲して堅材を求め堅材を探し求めてさまよいながら、鋭い斧をもって林に入っていくとしよう。そこで、彼は、真つ直ぐに伸びたとても高い新しい芭蕉樹の幹を見たときしよう。彼は、その根元を切るとしよう。根元を切ってからてつぺんを切るとしよう。てつぺんを切ってから、樹皮を剥いでいく。彼は樹皮を剥いても、膚材にすら到達することはできない。ましてや真実（精髓、サーラ）にまで達することができようか。

10. 眼ある人はこれを見て、静観し、正しく考察するだろう。彼がそれを見て、静観し、正しく考察するならば、それは、まったく虚ろなものであって、空虚であり、実質のないものに見えるであろう。それならば、どうして芭蕉樹の幹に真実（精髓、サーラ）があるだろうか。

11. このように、比丘たちよ、いかなる志向作用であれ、過去・未来・現在のものであれ、うちであれ、外であれ、粗いものであれ、細かいものであれ、劣ったものであれ、すぐれたものであれ、遠くであろうと近くであろうと、比丘たちよ、それを見て静観して正しく考察する。彼がそれを見て静観し正しく考察するならば、比丘たちよ、どうして志向作用に真実（精髓、サーラ）があるだろうか。

【識別作用】

12. 比丘たちよ、たとえば、幻術師が、あるいは、幻術師の弟子が、四つ辻の大道で幻術をあらわすとしてしよう。眼ある人は、これを見て静観し正しく考察するだろう。彼はこれを見て静観し正しく考察するならば、これが虚ろなものであって、空虚であり、実質のないものに見えるであろう。そうであるなら、比丘たちよ、幻術について真実（精髓、サーラ）はあるだろうか。

13. このように、比丘たちよ、いかなる識別作用であれ、過去・未来・現在のものであれ、うちであれ、外であれ、粗いものであれ、細かいものであ

れ、劣ったものであれ、すぐれたものであれ、遠くであろうと近くであろうと、比丘たちよ、それを見て静観し、正しく考察する。彼がそれを見て静観し正しく考察するならば、それは虚ろなものであって、空虚であり、実質のないものである。そうであるなら、比丘たちよ、どうして識別作用において眞実（精髓、サーラ）があるであろうか。

14. このように見るならば、比丘たちよ、よく教えを聞く聖なる弟子は、色形に関して離れ、感受作用についても離れ、表象作用についても離れ、志向作用についても離れ、識別作用についても離れる。離れたものは、貪欲を離れて解脱する。解脱したとき、「わたしは解脱した」という知識が生ずる。「生存はすでに尽きた、清らかな行いは修せられた、なすべきことをなし終えた、」もはやこの世の生存を受けることはないとするのである。

※原文では「」内は略されている

15. 尊師はこのように語った。スガタ（＝ブツダ）はこのように語って、さて、また、大師（＝ブツダ）は次のように述べた。

色形は泡沫のごとくである。感受作用は泡のごとくである。

表象作用はかげろうのごとくである。志向作用は芭蕉のごとくである。

識別作用は幻のごとくである。日種族のもの（＝ブツダ）はこのように語った。//1//

静観する通りに、その通り正しく考察するならば、人は、それ※を虚ろであり、空虚であると正しく見る。//2//

※色形、感受作用など。

この身体に関しては、智慧広き者（＝ブツダ）は（次のように）説いた。（次の）三つのものが（身体を）離れたなら、色形は捨てられたと（おまえ達は）見なければならぬ。//3//

寿命と熱と識別作用が身体を離れたとき、（身体は）うち捨てられて横たわり、意識なきものとして、他のものの食べ物となるのである。//4//

かの連続はこのようなものであって、幻の中における患者のたわごとである。これは殺す者であると言われる。ここに眞実（サーラ）は知られない。//5//

このように五蘊※を見よ。比丘たちは精進に勤めるものたちであれ。昼も夜も、正しく知ってよく念じているものたちであれ。//6//

※色形、感受作用、表象作用、志向作用、識別作用の五つのあつまり。

すべての束縛を断て。自己をよりどころとせよ。頭に火を点じて行ぜよ。不
死の道を求めよ。三三三

※原文では略されているところもなるべく略さずに書いています。

駒沢大学教授 奈良(なら) 康明(やすあき)

ききて 草柳 隆三

草柳..

「悪魔(マール)、悪魔と言いますが、尊師よ、いったい悪魔とは何でしょうか。」
「ダーラよ、色(しき)(肉体)があれば、そこに悪魔がいる。・・・だからこそ、色を悪魔と観、殺す者と観、死ぬ者であると観、あるいは病気であり、はれものであり、刺であり、痛みであり、痛みの源もとであると観ずるがよい。色をこのように観る者が正しく観るのである。

：：受、：：想、：：行、：：識。」

これは修行者との対話ということなんでしょうか。

奈良..

そうなんです。ダーラという修行者がおりました、このダーラという修行者は大変愉快な個性を持った人のように思います。「サンユッタニカーヤ」の中に、このダーラという修行者のエピソードばかり集めた章がありますね。それをずっと見ていきますと、とにかくつこいんですね。いろんな理屈に理屈を重ねて問い詰めていくのが、どうも好きな青年修行者だったようなんですね。

草柳..

ここではしかしブツダは、「悪魔を何だ」というふうに、結局は見ているでしょうか。

奈良..

結局「悪魔って何だ」と聞かれるわけですね。まず「色(しき)」があればそこに悪魔がいるという。「色」というのは、一番最後に「受・想・行・識」とごさいましたけれども、いわゆる五蘊の中の最初の、要するに人間を肉体と精神というふうに分けた時の肉体を色というわけですから。ここでは肉体があればそこに悪魔がいるんですよ、と。この悪魔という言葉の原語を「マール」と言います。漢訳経典では、「悪魔」の「魔」に「羅生門」の「羅」というものを書いたりするんですけども、その悪魔がいるからこそ色を悪魔と観と。つまり肉体に振り回される欲望がありますから、色の中に悪魔が棲んでいる。もう一ついうならば、肉体を悪魔と観るといふ。その次に「殺す者と死ぬ者」とあるんですが、実はこの「マール」という言葉が、「死ぬ」という動詞から出てきた言葉なんです。ですから「マール」は、「死ぬ者」という意味にもなりますし、少し発展させて、ここでは「殺す者」という意味にとっているんですね。で、死ぬこと、殺すこと、全部人間の嫌なことでありますから、そうしたものをひっくり返して肉体を煩惱の塊とみる、と。それから死ぬものであり、殺すものとみる。これもまあ悪魔の働きというふうに受け止めているんですね。その他肉体でありますから、病気とか、はれものとか、刺とか、痛みとか、痛みの源、肉体があるから痛みがあるわけですが、そういうふうに見まして、要するに肉体というものは、欲望の対象であり、欲望に振り回されがちなものであると、まず観なさい、と。そして次に同じ文章

が続きまして、「受・想・行・識」と。この四つは、前にも出たことがございますけれども、人間の心の働きをそういうふうに分けて説いたものでありますから、「受・想・行・識」即ち五蘊というものすべてが集まって、人間の身心、要するに人間存在ということになりますね。だから人間存在そのものの中に悪魔がいるのではないか。死というものも人間に付き随っているんですよ。いろいろな痛いこと、辛いことなども、人間存在にあるんですよ、と。それはみんな悪魔のなせるわざなんだ、と。そして悪魔を滅ぼさないと、それに振り回されて一生苦しみ続けることになりますよ、と。ですからそういうものは自我欲望の働きで、不必要に悩んだり、辛がったりするものだから、その抑制をしなければいけないんだ、ということが、その次の文章で出てくるわけですね。

草柳… これは先ほどの続きですね。

「尊者よ、正しく観察するのは、何のためですか。」

「ラーダよ、厭い離れるために、正しく観察するのである。」

「厭い離れるのは、何のためですか。」

「貪りを離れるためである。」

「貪りを離れるのは何のためですか。」

「解脱のためである。」

「解脱は、何のためですか。」

「涅槃（悟り）のためである。」

「涅槃は、何のためですか。」

やはりこの人は相当しつこいですね。

奈良…

しつこい質問をするんですよ。つまり「色・受・想・行・識」について、それは本来こういうものである、と。正しくみなさい、ということを行いましたですね。それを受けまして、ラーダは、「正しく観るって、観たらどうなるんですか」と。釈尊が、「正しく観るといふことは、人間の肉体でも心の働きでも、いろいろ欲望に振り回されて、いうならば、ないものをねだり、限りなくねだっている、いつも欲求不満に陥っているようなことがあるから、そういうないものをねだる。限りなくねだる。そういう気持というものを厭い離れるために、人間の本当のありようというものを正しく観察しなければいけない、と。こういうわけですね。そうすると、「厭い離れるのは何のため」と、こう聞くわけですね。やはり欲望に振り回されるために貪りというもので、あれもほしい、これもほしい、あるいはこれが要らない、これは向こうへいけ、といったような、そういう貪りを離れるために、正しく観察しなければいけない。今度は「貪りを離れるのは何のためだ」と。「解脱のためである」解脱というのは、解放されること、解き放たれることですね。要するに、自我欲望、あるいは老病死といってもいいんですが、老病死、そうした拘りですね。決して老病死をなくせということではむしろ

ないんで、私どもは老病死を考える時に、その反対側の若さとか、健康とか、命というものに拘って、老病死を嫌がりますね。でも老は否応なしにくるわけですし、死は必然的なものでありますし、やっぱりそうしたものをあるがままにみないし、ないものねだりをするようになります。そういう老病死とか、あるいは自我欲望というものの束縛から離れた状態を解脱と、こうみてよろしいと思うんですね。大体そこまで聞けば「わかった」と言いそうなものなんですけど、それをまた「解脱は何のためですか」という。そうすると、釈尊は「それは悟りのためである」。そういう自我欲望というそうしたものから解放されて、真実の中に包まれているという一つの領き、般若の知恵を得ること、そういう悟りのためである。悟りというのは、釈尊も悟りを開いてブツダになられたわけですけども、ここまでいけばいいんですけども、さらに「涅槃は何のために悟らなければならぬんですか」と聞くんですね。そうすると、釈尊がたしなめる文章が実はこの後続いてくるんであります。

草柳..

お読み致します。

ラーダよ、それは問い過ぎである。問いには限度があるということをお前は判らないようだ。心身を浄める修行を信じ続けるのは、ラーダよ、涅槃に至るためであり、涅槃に赴くためであり、涅槃が窮極の目的なのだ。

(「サンユッタニカーヤ」)

というふうには釈尊は答えているわけですね。

奈良..

とても臨場感があると言いますかね、ラーダというのは、おそらく真面目な修行者で、夢中になって釈尊に質問をしていっているんだろうと思います。それに対して、釈尊が懇切丁寧に答えながら、「さすがにお悟りは何のためを得るんですか」と聞かれたら、「それは問いすぎだよ」と。「問うにもやっぱり限度があるということを少しお前さん覚えるべきだ」と、こういうことを言いましたね。結局身心を浄める修行を信じ続ける。ということは、自我欲望というものをしるべき形で抑制をし、それが身に付くような修行をしていくのが、結局涅槃に至るためなんだ。涅槃というのは、いわば真実に心が開かれて、心の平安を得る状態でありますから。そして釈尊の悟りの目的は、この状態を得て、人生を生きっていくことでありましょうからね。それ以上の何にもないではないか、と、こういう趣旨の文章でありますね。

草柳..

この問答はいくらかユーモラスな感じにさえ聞こえますけれども、しかし言っていることは、聞く方も真剣に聞いて、答える方も言ってみれば、仏教のありようと言いますか、仏道というものはこういうものだ、ということを実に端的に、むしろ言っているというふうにみていいわけですか。

奈良..
ですからラーダという修行者が、おそらく若い修行者だと思われませんが、かなりしつこく聞いてくれたお陰で、大変今おっしゃったような仏教の基本の骨格というものが明らかに出てきた。そんな意味もあるかも知れませんがね。

草柳..
凄い問答ですね。

奈良..
凄い問答ですね。そんなことで、悟りを開かれた釈尊ではあるけれども、その後でも実は欲望の疼きといったものはあるんですね。それじゃ欲望が出てくるならば、お悟りを開いても開かなくても同じじゃないか、ということにもなりかねない。その辺のことをもう一つ、これまた面白い例がありますので、それをご紹介頂きながら、少し考えてみたいと思うんですが。

草柳..
殺すことも、殺させることもなく、勝つこともなく、勝たせることもなく、悲しむことも、悲しませることもない、正しい法による政治は出来ないものだろうか。

これはどういうふうな状況なんですか。

奈良..
これは釈尊が一人瞑想していたというんですね。これも釈尊が悟りを開かれた後の話です。そうしました時に、やはり釈尊が生きていた非常に殺伐とした時代、多くの人たちが殺されていく荒っぽい時代、戦争も絶えなかったでありましたよね。そうした時代を見ながら、釈尊は戦争などがあっては多くの人が殺されていく、傷ついていく。勝った、負けたということ、また争いがある。世の中が悪い。政治が悪いと。何か人を殺すことも、殺させることもなく、勝つということも、勝たせることもなく、悲しむことも悲しませることもない、正しい法による政治はできないものか、と、釈尊は考えるんですね。

草柳..
つまり勿論悪魔の囁きとして、ブツダに問い掛けるわけですね。

奈良..
この場合には、むしろ悪魔の囁きの前段階と言ってもいいと思うんですが、そういう考えが釈尊に出てくるのは、私は無理ないと思うんですね。釈尊という方は、もともと釈迦族の王子として生まれた人でありまして、出家修行者にならなければ父親の王様の後を継いで、政治家というんですか、王様として政治を行っていた人なんですね。ですから修行者になってしまったわけですけども、しかしそうしたことの知らない世界ではありませんし、世の中の乱れというものを見て、心が痛んだに違いないんですね。何とかそういう政治はできないものか、と。これも釈尊の心の中の思いですが、それを受けまして、もう一つ進みますと、悪魔の声が大きくなってくるんですね。それを一つ続きがございましてお読み頂きたいんですが。

草柳..
黄金や純銀でできた山があっても、さらにその二倍あっても、一人の人を満足さ

せることはできない。このように知って、心おだやかに生きよ。苦悩とその原因を知った人は、どうして欲望に心を傾けよう。世間の執着は人を束縛するものを知って、それを抑制することを習うべきである。

〔サンユッタニカーヤ〕

奈良..

つまりそういう心がありまして、今度は悪魔が声を大にして、「そうだ、そうだ。世の中は乱れている。何とかしなくちゃいかん。人々が傷ついている。お釈迦さん、あなたはもともと王族の出身である。あなた自ら出でて政治をやったらどうですか。理想の政治をおやりなさいよ」。これが悪魔の囁きですね。そういう声がやっぱり釈尊にあつても不思議はないんで、これは人々の苦しんでいるのを見て、慈悲に溢れていい政治をしたいというんですから、その欲望自体は決して悪い欲望ではないんですけれども、それを釈尊は退けていくわけですね。黄金やら銀の山があり、人間の欲望は満足しないと。二倍あつてもダメだと。それだけの黄金、銀が一人の人をさえ満足させることはできない。つまりいいことも知れないけれども、これは自分の修行者の道を歩んだ者として、これはなすべきことではないんだと。それをやるということは、自分の埒外(らちがい)に出てくる、やはり私の欲望なんだということを、釈尊はそれを知るわけですね。そして悪魔に対して、「苦悩とその原因を知った人は、どうして欲望に心を傾けようか。世間的な執着は人を束縛するのだ」ということで、釈尊は世間を出た修行者としての立場、そして修行のありようをきちっとおさめて、ここで悪魔を退けていくわけですね。ですからこういうふうには、釈尊の心の中にいろいろな思いは出てくる。これはやっぱり欲望の疼きと言ってもいいでしょうね。それはやっぱり出てくる。出てくることを仏典は正直に表明して隠さないわけですね。それじゃ釈尊はそれに乗っかっちゃって、「そうだ、そうだ」といくと、欲望に振り回されたことになる。仏典にはこうした言葉の後に、これは悪魔は、「釈尊は、私を知っている。見抜いている、と意気消沈して姿を消した」と書いてあるんですね。私は、これとつても大事なことだと思えます。つまり悪魔が出てくる。釈尊がその悪魔の囁き声を退けます。自我欲望の誘惑を退けます。それを悪魔の囁きだと意識しているわけなんです。単に嫌だとか、好きでなくて、これは私の自我なんだ、ということをはつきりして退けていく。この退けることが、私どもですと、そうした欲望が出てくる。それを退けていくのに大変苦労しなければいけない。ところが釈尊はそれだけの修行をし、悟りを開かれた方でありますから、そういう欲望の疼きが出てきても、ある意味では、「はあ、またやってきたな」といったような苦笑いしながら、という感じをいつも私は持つんですが、自分で苦笑いしながら、自分の心の中の悪魔に向かって、「悪魔よ、退け、と。お前の出てくる場所じゃないんだ」と言つて、それをスツと退けていく。私どもではなかなかできないことが、釈尊はそれをふつとやつてのける。そこに修行の積み重ねの有無の大きな違いがあると思うんですね。

草柳..

それとそうやって浄土と言いますか、お釈迦様がある境地に達して、普通だった

ならばもうそうしたお釈迦様に悪魔が憑くはずがないと思われていたにも関わらず、最後までいつも何かの形で悪魔が攻めてくるというか、悪魔に取り憑かれる、というところが、これがまた実に凄いと云うところなんですね。

奈良..

そうなんですね。やはり欲望が出てくる。そしてその欲望を「はあはあ、またやっているな」というんで、自分の心をぴちつと見抜いて退ける。もう一つそれに似たようなことで面白い例がありますので、ちょっとご紹介頂きたいと思います。

草柳..

悪魔

あなたは人に教えを説く資格があるのですか。言うことをよく聞く人には優しくし、言うことを聞かない人間を憎いと思う。説法をしながら、そういう執着があるのではないですか。

ブツダ

如来が人に教えを説くのは、人々への思いやりから説くので、言うことを聞いてくれるとか、聞いてくれないとかいうことから離れている。

(「サンユッタニカーヤ」)

奈良..

ここは私どもも大学で実は教えているわけですが、いろいろな問題で思い当たらないわけではないんですよ。ところが私どもは、大学というのは原則として知識を教えている面がございましょう。それでもやはりそこにウンウンと頷きながら熱心に聞いてくれる学生がいると、そっちの方に顔を向けて、「わかったか」というようなことで喋ってみたりなんてないわけじゃないんですよ。決して依怙鼻肩(えこひいき)しているわけじゃないんですよ、人間ですからそういうことがある。ただ釈尊は知識を教えているんじゃないんですよ、自分から出てきた信念を語っているわけですが、それにしてもお説教して釈尊の中に、自分はウンウンと頷いているような人によく説いて、わからなそうな顔をしている人間は切り捨てていく。そんなことがあるんじゃないのかなという、一つの反省があるんですね。それが悪魔として出てきまして、「依怙鼻肩しているんじゃないか。執着しているんじゃないか」という。それに対して、釈尊は、「反省をし、自分に振り返ってみて、いわゆる私はそれはやっていない」と、こういうふうに悪魔の囁きを退けていくわけですね。ですからこういうふうに悟りを開いた後でも、釈尊に本能の疼きがあり、それが悪魔の声として出てくる。その辺にとても人間釈尊の親しみやすい面が一つあると同時に、実は単なる人間釈尊—私どもと同じ人間釈尊じゃなくて、そういう悪魔の囁きがありながら、それをピチツと退けていって、自分の道を真っ直ぐ歩き続けていく、毅然とした一つの修行者の道が続けていくところに、悟りを開いたブツダとしての釈尊が、そこに一つあるわけですね。

草柳..

「これが悪魔だ」ということを知り抜いて、悪魔に対面をした。つまり打ち負か

した。我々ですと、つまり自分に取り憑いたのが、悪魔がどうか、実はよく見定めができない、というふうなことからあるわけですね。これは大変な悲劇なんでしょうけれども。

奈良.. でもその通りなんです。釈尊の場合、それがはつきりと、「私の自我欲望なんだ」と意識しているところに、釈尊の偉さがあるわけでございますし、私どもも社会に生きておりました、いろんなことがあるんですけども、何をやっているか意識できない。やはり自分の自我というものを意識し、それに対決していくところに、仏教的な、より進歩した生き方ができる、という面があります。そういう意味でとても大切な教えだと思いますですね。

草柳.. つまり求道というか、求道者であった、ということなんでしょうか。

奈良.. 道を歩き続けた釈尊という面目躍如たる教えだと思いますですね。

草柳.. 今日はどうも有り難うございました。

これは、平成十一年八月十五日に、NHK教育テレビの「このころの時代」で放映されたものである

正覚 正覚 しょうがく [s : sa bodhi] 原語は、完全なる悟りの意。〈三藐三菩提(さんみやくさんぼだい)〉(samyak sa bodhi) 正しく完全なる悟りも同義。また、sa buddha(完全に悟れる者)の訳語として、〈仏〉を意味することもある。〈正覚〉は、「小乗仏教では主に「釈尊(しやくそん)が菩提樹(ぼだいじゆ)下で成就した」、「四諦(したい)・八正道(はっしやうどう)・縁起(えんぎ)などの理法に対する悟りをさす」。大乘仏教では、諸仏が等しく成就する「無上・不偏の悟りであり、経典や宗派によって解釈は異なるが、おおむね「無相の「真如(しんによ)や「諸法の「実相などの体悟を内容とする」。釈迦の御のり正覚成り給ひし日より、涅槃に入り給ひし夜にいたるまで「三宝絵(中)」「初発心の時、すなはち正覚を成ず」「義鏡(上)」。(岩波)

寶月 是佛成道已來過六十億劫 又其佛國晝夜無異 但以此間閻浮提日月歲數說彼劫壽 其佛光明常照世界 於一説法令無量無邊千萬億阿僧祇衆生住無生法忍 倍此人數得住初忍第二第三忍 寶月 其佛本願力故 若有他方衆生 於先佛所種諸善根 是佛但以光明觸身 即得無生法忍 寶月 若善男子善女人聞是佛名能信受者 即不退阿耨多羅三藐三菩提 餘九佛事皆亦如是 寶月、この仏成道よりこのかた六十億劫を過ぎたまへり。またその仏国は昼夜異なることなし。ただこの間の閻浮提の日月歳数をもつてかの劫寿を説く。その仏の光明つ

ねに世界を照らしたまふ。

一の説法において、無量無辺千万億阿僧祇の衆生をして無生法忍に住せしめ、この人数に倍して初忍・第二・第三忍に住ずることを得しめたまふ。宝月、その仏の本願力のゆゑに、もし他方の衆生ありて、先仏の所においてもろもろの善根を種ゑんに、この仏ただ光明をもつて身に触れたまふに、すなはち無生法忍を得。宝月、もし善男子・善女人ありてこの仏の名を聞きてよく信受するものは、すなはち阿耨多羅三藐三菩提を退せず」と。余の九仏の事みなまたかくの「ごとし」。

宝月よ、この仏が成仏せられてから六十億劫こうを過ぎた。またその仏の国は昼夜の別がない。ただこの閻浮提の日月年数をもつてかの劫数を説くのである。その仏の光明はいつも世界を照らし、一たびの説法において無量無辺千万億阿僧祇の衆生をして無生法忍に住せしめ、この人数に倍して初忍・第二・第三忍に住せしめる。宝月よ、その仏の本願力のゆゑに、もし他方の衆生が先の仏のみもとでいろいろの善根を植えたならば、この仏はただ光明をもつてその身に触れて、すなわち無生法忍を得させたものである。宝月よ、もし善男子・善女人でこの仏名を聞いてよく信受する者は、すなわち不退の位を得る。ほかの九方の仏の事も皆またこのとおりである。」

劫

こう【劫】P:kappa Sk:kapa の音写。劫波とも音写。インドの時間的単位のうち最も長いもの。ぎわめて長い時間のこと。世界の年齢。普通は、永遠の時間、無限の時間と考えていいようである。（その無限の時間を一つの単位として考えていた。）永遠。宇宙論的時間。世界が成立し、存続し、破壊され、空無となる一つ一つの時期をいう。測定できない長い時間のこと。幾億万年。極大なる時限。その長さを『雜阿含經』（第二四卷）には、磐石劫・芥子劫のたとえで表している。四方上一由旬の鉄城に芥子を満たし、百年ごとに一つの芥子を取り去つて、その芥子全部を尽くしても劫は終わらない。また四方一由旬の大磐石を百年に一度ずつ白氈で払つて、その石がなくなつても劫は終わらないという。『大毘婆沙論』（第一三五卷）、『大智度論』（第三八卷）などにも同様のたとえがある。四十里の石山を長寿の人か百年に一度ずつ細軟の衣をもつて払拭して、この石山を尽くしても、なおこの劫は尽きない。また四十里の大城に芥子を満たし、長寿の人が百年に一度来て、一つの芥子を取り去ることにして、芥子が尽きても、劫はなお尽きない。『大智度論』五卷（大）二五卷100下）

（仏教語）

無生法忍

無生の法理の認証の意。空であり、実相であるという真理を認め安住すること。一切のものが不生不滅であると認めること。不生不滅の真如の理を智慧をもつてさとることのものはすべて不生不滅であるという確信。忍は忍可・認知の意で確かにそうだと認めること真実の理をさとした心の安ら

ぎ。不生不滅の理に徹底したさとり。無生忍ともいう。三法忍の一つ。

(仏教語)

不生不滅 生ずることも滅することもないこと。常住であること。さとの境地を形容している。

教行信証 真仏土

如来すなわち虚無なり。真解脱は不生不滅なり。このゆえに解脱すなわちこれ如来なり。(仏教語)

今當解説諸佛名號及國土名號 善徳者 其徳淳善但有安樂 非如諸天龍神福德惑惱衆生 梅檀徳者 南方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名歡喜 佛號梅檀徳 今現在説法 譬如梅檀香而清涼 彼佛名稱遠聞如香流布 滅除衆生三毒火熱令得清涼 無量明佛者 西方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名善 佛號無量明 今現在説法 其佛身光及智慧明炤無量無邊 相徳佛者 北方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名不可動 佛名相徳 今現在説法 其佛福德高顯猶如幢相 無憂徳者 東南方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名月明 佛號無憂徳 今現在説法 其佛神徳令諸天人無有憂愁 寶施佛者 西南方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名衆相 佛號寶施 今現在説法 其佛以諸無漏根力覺道等寶常施衆生 華徳佛者 西北方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名衆音 佛號華徳 今現在説法 其佛色身猶如妙華其徳無量 三乘行佛者 東北方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名安隱 佛號三乘行 今現在説法 其佛常説聲聞行辟支佛行諸菩薩行 有人言 説上中下精進故 號爲三乘行 明徳佛者 下方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名廣大 佛號明徳 今現在説法 明名身明智慧明寶樹光明 是三種明常照世間 廣衆徳者 上方去此無量無邊恒河沙等佛土有世界名衆月 佛號廣衆徳 今現在説法 其佛弟子福德廣大故號廣衆徳 今是十方佛善徳爲初 廣衆徳爲後 若人一心稱其名號 即得不退於阿耨多羅三藐三菩提

いままさに諸仏の名号および国土の名号を解説すべし。「善徳」といふは、その徳淳善にしてただ安樂のみあり。諸天・竜神の福德の、衆生を感悩するがごときにはあらず。「梅檀徳」といふは、南方ここを去ること無量無邊恒河沙等の仏土にして世界あり、歡喜と名づく。仏を梅檀徳と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。たとへば梅檀の香ばしくして清涼なるがごとく、かの仏の名称遠く聞ゆること、香の流布するがごとし。衆生の三毒の 火熱を滅除して清涼なることを得しむ。

「無量明仏」といふは、西方ここを去ること無量無邊恒河沙等の仏土にして世界あり、善と名づく。仏を無量明と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏の身光および智慧明照にして無量無邊なり。

「相徳仏」といふは、北方ここを去ること無量無邊恒河沙等の仏土にして世界あり、不可動と名づく。仏を相徳と名づく。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏の福德高顯なること、なほ幢相のごとし。

「無憂徳」といふは、東南方ここを去ること無量無邊恒河沙等の仏土にして世界あり、

月明と名づく。仏を無憂徳と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏の神徳もろもろの天・人をして憂愁あることなからしむ。

「宝施仏」といふは、西南方ここを去ること無量無辺恒河沙等の仏土にして世界あり、衆相と名づく。仏を宝施と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏もろもろの無漏の根・力・覚・道等の宝をもつてつねに衆生に施す。

「華徳仏」といふは、西北方ここを去ること無量無辺恒河沙等の仏土にして世界あり、衆音と名づく。仏を華徳と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏の色身、なほ妙華のごとく、その徳無量なり。

「三乗行仏」といふは、東北方ここを去ること無量無辺恒河沙等の仏土にして世界あり、安穩と名づく。仏を三乗行と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏つねに声聞の行、辟支仏の行、もろもろの菩薩の行を説きたまふ。ある人いはく、「上・中・下の精進を説くがゆゑに、号して三乗行となす」と。

「明徳仏」といふは、下方ここを去ること無量無辺恒河沙等の仏土にして世界あり、広大と名づく。仏を明徳と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。明とは身明・智慧明・宝樹光明に名づく。この三種の明つねに世間を照らす。

「広衆徳」といふは、上方ここを去ること無量無辺恒河沙等の仏土にして世界あり、衆月と名づく。仏を広衆徳と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。その仏の弟子福徳広大なるがゆゑに広衆徳と号す。いまこの十方の仏、善徳を初めとなし、広衆徳を後となす。もし人一心にその名号を称すれば、すなはち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得。

今まさに諸仏の名号および国土の名号を解説しよう。善徳とはその徳が淳善でただ安樂のみがある。諸天・竜神の福徳があるいは衆生を悩ますようなのと異なる。梅檀徳とは、南方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに歓喜と名づける世界があつて、

仏を梅檀徳という。いま現にましまして法を説いておられる。たとえば梅檀が香つて清涼なようである。かの仏の名号が遠く聞えることは、香りが流れるように、衆生の三毒の火熱を除いて清涼ならしめる。

無量明仏とは、西方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに善解と名づける世界があつて、仏を無量明という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏の身光および智慧は明らかに照らして無量無辺である。

相徳仏とは、北方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに不可動と名

づける世界があつて、仏を相徳という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏の福德が高く顕れていることは、あたかも幢ぼこの相のようである。

無憂徳とは、東南方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに月明と名づける世界があつて、仏を無憂徳という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏の不思議な徳は、多くの天人たちをして憂いなからしめる。

宝施仏とは西南方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに衆相と名づける世界があつて、仏を宝施という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏は無漏の五根・五力・七覚・八正道どうなどの宝をもつて常に衆生に施される。

華徳仏とは、西北方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに衆音と名づける世界があつて、仏を華徳という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏のおすがたは妙なる蓮華のようで、その徳は無量である。

三乗行仏とは、東北方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに安隠と名づける世界があつて、仏を三乗行という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏は常に声聞の行、縁覚の行、いろいろの菩薩の行を説かれる。ある人がいうには、上中下の法を説いて精進させるから三乗行と申しあげるのであると。

明徳仏とは、下方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに広大と名づける世界があつて、仏を明徳という。いま現にましまして法を説いておられる。明とは身の光明、智慧の光明、宝樹の光明をいう。この三種の光明をもつて常に世間を照らすのである。

広衆徳とは、上方ここを去る無量無辺恒河沙等の仏土を過ぎたところに衆月と名づける世界があつて、仏を広衆徳という。いま現にましまして法を説いておられる。その仏の弟子の福德が広大であるから広衆徳というのである。今この十方の仏は善徳仏を初めとし広衆徳仏を最後とする。もし人が一心にその名号を称えるならば、すなわち不退の位を得るであろう。

如偈説

【9】 偈に説くがごとく。

【9】 この偈に説く通りである。

若有人得聞 說是諸佛名
其有稱名者 即得不退轉

即得無量德 如爲寶月說

我禮是諸佛 今現在十方

もし人ありてこの諸仏の名を説くを聞くことを得れば、
すなはち無量の徳を得。宝月のために説きたまふがごとし。
われこの諸仏を礼したてまつる。いま現に十方にまします。
それ名を称することあれば、すなはち不退転を得。

もし人あつて この諸仏のみ名のいわれを聞き得たならば
すなわち無量の徳を得ることは 宝月のために説かれた通りである
わたしはこの諸仏を礼拝らはいしたてまつる 今現に十方におられる
そのみ名を称える人は すなわち不退転を得る

東方無憂界 其佛號善徳
我今合掌禮 願悉除憂惱

色相如金山 名聞無邊際

若人聞名者 即得不退轉

東方に無憂界あり、その仏を善徳と号す。
色相金山のごとし。名の聞ゆること辺際なし。
もし人名を聞けば、すなはち不退転を得。
われいま合掌し礼したてまつる。
願はくはことごとく憂悩を除きたまへ。

東方の無憂世界の 仏を善徳と申しあげる
おすがたは金山のようで み名の聞こえることほとりがない
もしみ名を聞く人は すなわち不退転を得る
わたしはいま合掌礼拝して 願わくは憂う悩のうを除かれることを

南方歡喜界 佛號梅檀徳
聞名得不退 是故稽首禮

面淨如滿月 光明無有量

能滅諸衆生 三毒之熱惱

南方に歡喜界あり、仏を梅檀徳と号す。
面の淨きこと満月のごとし。光明量りあることなし。
よくもろもろの衆生の三毒の熱悩を滅したまふ。
名を聞くもの不退を得。このゆゑに稽首し礼したてまつる。

南方の歡喜世界の 仏を梅檀徳と申しあげる
お顔の淨らかなこと満月のごとく 光明は量りあることがない
よく多くの衆生の 三毒の熱悩を滅したもう

み名を聞けば不退を得る　それゆえぬかざき礼らいしたてまつる

西方善世界　佛號無量明
我今稽首禮　願盡生死際

身光智慧明　所照無邊際

其有聞名者　即得不退轉

西方に善世界あり、仏を無量明と号す。
身光・智慧あきらかにして、照らすところ辺際なし。
その名を聞くことあれば、すなはち不退転を得。
われいま稽首し礼したてまつる。願はくは生死の際を尽したまへ。

西方の善世界の　仏を無量明と申しあげる
おん身の光も智慧も明らかで　ほとりきわなく照らされる
そのみ名を聞く人は　すなわち不退転の位に至る
わたしは今ぬかざき礼したてまつる　願わくは生しよう死じをとこしえに断ちきる
ことを

北方無動界　佛號爲相徳
聞名得不退　是故稽首禮

身具衆相好　而以自莊嚴

摧破魔怨衆　善化諸人天

北方に無動界あり、仏を号して相徳となす。
身にもろもろの相好を具し、もつてみづから莊嚴し、
魔怨の衆を摧破し、よくもろもろの人天を化したまふ。
名を聞けば不退を得。このゆゑに稽首し礼したてまつる。

北方の無動世界の　仏を相徳と申しあげる
身に多くの相好をそなえて　みづからを莊嚴し
多くの魔の怨敵をくだき　善く天・人たちを化け益やくされる
み名を聞けば不退を得る　それゆえぬかざき礼したてまつる

東南月明界　有佛號無憂
十方佛稱讚　是故稽首禮

光明喻日月　遇者滅煩惱

常爲衆説法　除諸内外苦

東南の月明界に、仏ましまして無憂と号す。
光明日月に喩へ、遇ふもの煩惱を滅す。
つねに衆のために法を説き、もろもろの内外の苦を除きたまふ。
十方の仏称讚したまふ。このゆゑに稽首し礼したてまつる。

東南の月明世界に 無憂と申す仏がおられる
光明は日月にこえて 遇う者は憂悩を滅する
いつも衆のために法を説き すべての心身の苦しみを除かれる
十方の諸仏は称讃せられる それゆえぬかずき礼したてまつる

西南衆相界 佛號爲寶施 常以諸法寶 廣施於一切 諸天頭面禮 寶冠在足下
我今以五體 歸命寶施尊

西南に衆相界あり、仏を号して宝施となす。
つねにもろもろの法宝をもつて、広く一切に施したまふ。
諸天頭面をもつて礼して、宝冠足下にあり。
われいま五体をもつて、宝施尊を帰命したてまつる

西南の衆相世界の 仏を宝施と申しあげる
常にいろいろの法宝をもつて ひろく一切の者に施される
諸天はぬかずき礼して その宝冠が仏の足下にある
わたしはいま五体をもつて 宝世尊に帰き命みようし礼したてまつる

西北衆音界 佛號爲華徳 世界衆寶樹 演出妙法音 常以七覺華 莊嚴於衆生
白毫相如月 我今頭面禮

西北に衆音界あり、仏を号して華徳となす。
世界にもろもろの宝樹ありて、妙法音を演出す。
つねに七覚の華をもつて、衆生を莊嚴す。
白毫相月のごとし。われいま頭面をもつて礼したてまつる。

西北の衆音世界の 仏を華徳と申しあげる
その世界に多くの宝樹があつて 妙なる法音を説きのべる
つねに七覚の華をもつて 衆生を利益される
白毫相は月のようなのである わたしは今ぬかずき礼したてまつる

東北安隱界 諸寶所合成 佛號三乘行 無量相嚴身 智慧光無量 能破無明闇
衆生無憂惱 是故稽首禮

東北の安穩界、諸宝をもつて合成するところなり。
仏を三乗行と号す。無量の相をもつて身を嚴りたまふ。
智慧の光無量にして、よく無明の闇を破したまへば、
衆生に憂悩なし。このゆゑに稽首し礼したてまつる。

東北の安隱世界は いろいろの宝でできている

仏を三乗行と申しあげる 無量の莊嚴で身をかざり
智慧の光は量りなく よく無明の闇を破り
衆生は憂い悩みがない それゆえぬかずき礼したてまつる

上方衆月界 衆寶所莊嚴 大徳聲聞衆 菩薩無有量 諸聖中師子 號曰廣衆徳
諸魔所怖畏 是故稽首禮

上方の衆月界、衆宝をもつて莊嚴するところなり。
大徳の声聞衆、菩薩量りあることなし。
諸聖のなかの獅子なり。号して廣衆徳とのたまふ。
諸魔の怖畏するところなり。このゆゑに稽首し礼したてまつる。

上方の衆月世界は 衆宝で莊嚴されてある
すぐれた徳をそなえた声聞衆や 菩薩たちの数は量り知られぬ
これら聖しよ者じゃたちのかしらである仏を 廣衆徳と申しあげる
悪魔たちの畏れるところである それゆえぬかずき礼したてまつる

下方廣世界 佛號爲明徳 身相妙超絶 閻浮檀金山 常以智慧日 開諸善根華
寶土甚廣大 我遙稽首禮

下方に広世界あり、仏を号して明徳となす。
身相妙にして、閻浮檀金山に超絶す。
つねに智慧の日をもつて、もろもろの善根の華を開きたまふ。
宝土はなほだ広大なり。われはるかに稽首し礼したてまつる。

下方の広大世界の 仏を明徳と申しあげる
身相は妙であつて 閻浮檀金山よりもすぐれている
いつも智慧の日をもつて いろいろの善根の華を開かせる
宝土は甚だ広大である わたしは遙かにぬかずき礼したてまつる

過去無數劫 有佛號海德 是諸現在佛 皆從彼發願 壽命無有量 光明照無極

過去無數劫に、仏ましまして海德と号す。
このもろもろの現在の仏、みなかれに従ひて願を發せり。
寿命量りあることなし。光明照らして極まりなし。

無數劫のいにしえに 海德という仏がましました
いま現にましますこの仏たちは 皆かの仏に従つて願いを起こされた

寿命は量りなく 光明はきわなく照らし

国土甚清淨 聞名定作佛

今現在十方 具足成十力

是故稽首禮 人天中最尊

国土はなはだ清淨なり。名を聞けばさだめて仏に作る。いま現に十方にましまして、十力を具足し成じたまふ。このゆゑに人天のなかの最尊を稽首し礼したてまつると。

その国土は甚だ清淨で み名を聞くならばかならず仏となろう
それらの仏がいま現に十方にましまして 十力をまどかにそなえておられる
それゆゑ人天中の最も尊い仏たちに ぬかずき礼したてまつる

百七仏章

問曰 但聞是十佛名號執持在心 便得不退阿耨多羅三藐三菩提 爲更有餘佛餘菩薩名得至阿惟越致耶

【7】 問ひていはく、ただこの十仏の名号を聞きて、執持して心に在けば、すなはち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得。さらに余仏・余菩薩の名ましまして、阿惟越致に至ることを得となすや。

【7】 問うていう。ただこの十仏の名号を聞いて心に信ずれば不退転の位を得るのであるが、さらにそのほかの仏や菩薩の名号によっても、また不退転の位に至ることができらるであろうか。

答曰 阿彌陀等佛 及諸大菩薩
敬禮拜稱其名號

稱名一心念 亦得不退轉 更有阿彌陀等諸佛 亦應恭敬

【8】 答へていはく、阿弥陀等の仏およびもろもろの大菩薩、名を称し一心に念ずれば、また不退転を得。また阿弥陀等の諸仏ましまして、また恭敬礼拝し、その名号を称すべし。

【8】 答えていう。阿弥陀仏などの仏たちおよび多くの大菩薩たちの名号を称えて一心に念ずれば、また不退転を得ることは、この通りである。阿弥陀仏などの仏たちもまた恭敬し礼拝してその名号を称うべきである。

今當具說 無量壽佛 世自在王佛 師子意佛 法意佛 梵相佛 世相佛 世妙佛 慈悲佛 世王佛
人王佛 月德佛 寶德佛 相德佛 大相佛 珠蓋佛 師子鬘佛 破無明佛 智華佛 多摩羅跋梅檀
香佛 持大功德佛 雨七寶佛 超勇佛 離瞋恨佛 大莊嚴佛 無相佛 寶藏佛 德頂佛 多伽羅香
佛 梅檀香佛 蓮華香佛 莊嚴道路佛 龍蓋佛 雨華佛 散華佛 華光明佛 日音聲佛 蔽日月佛
琉璃藏佛 梵音佛 淨明佛 金藏佛 須彌頂佛 山王佛 音聲自在佛 淨眼佛 月明佛 如須彌山
佛 日月佛 得衆佛 華生佛 梵音說佛 世主佛 師子行佛 妙法意師子吼佛 珠寶蓋珊瑚色佛
破癡愛闇佛 水月佛 衆華佛 開智慧佛 持雜寶佛 菩提佛 華超出佛 眞琉璃明佛 蔽日明佛
持大功德佛 得正慧佛 勇健佛 離諂曲佛 除惡根栽佛 大香佛 道映佛 水光佛 海雲慧遊佛
德頂華佛 華莊嚴佛 日音聲佛 月勝佛 琉璃佛 梵聲佛 光明佛 金藏佛 山頂佛 山王佛 音王
佛 龍勝佛 無染佛 淨面佛 月面佛 如須彌佛 梅檀香佛 威勢佛 燃燈佛 難勝佛 寶德佛 喜
音佛 光明佛 龍勝佛 離垢明佛 師子佛 王王佛 力勝佛 華齒佛 無畏明佛 香頂佛 普賢佛
普華佛 寶相佛 是諸佛世尊現在十方清淨世界 皆稱名憶念

【9】 こまかやここぶやこ説くべし。無量壽仏・世自在王仏・師子意仏・法意仏・
梵相仏・世相仏・世妙仏・慈悲仏・世王仏・人王仏・月徳仏・宝徳仏・相徳仏・大相
仏・珠蓋仏・師子鬘仏・破無明仏・智華仏・多摩羅跋梅檀香仏・持大功德仏・雨七宝
仏・超勇仏・離瞋恨仏・大莊嚴仏・無相仏・宝蔵仏・徳頂仏・多伽羅香仏・梅檀香仏
・蓮華香仏・莊嚴道路仏・竜蓋仏・雨華仏・散華仏・華光明仏・日音声仏・蔽日月仏
・琉璃蔵仏・梵音仏・浄明仏・金蔵仏・須彌頂仏・山王仏・音声自在仏・浄眼仏・月
明仏・如須彌山仏・日月仏・得衆仏・華生仏・梵音説仏・世主仏・師子行仏・妙法意
師子吼仏・珠寶蓋珊瑚色仏・破痴愛闇仏・水月仏・衆華仏・開智慧仏・持雜宝仏・菩
提仏・華超出仏・眞琉璃明仏・蔽日明仏・持大功德仏・得正慧仏・勇健仏・離諂曲仏
・除惡根栽仏・大香仏・道映仏・水光仏・海雲慧遊仏・徳頂華仏・華莊嚴仏・日音声
仏・月勝仏・琉璃仏・梵声仏・光明仏・金蔵仏・山頂仏・山王仏・音王仏・竜勝仏・
無染仏・浄面仏・月面仏・如須彌仏・梅檀香仏・威勢仏・燃灯仏・難勝仏・宝徳仏・
喜音仏・光明仏・竜勝仏・離垢明仏・師子仏・王王仏・力勝仏・華齒仏・無畏明仏・
香頂仏・普賢仏・普華仏・宝相仏なり。

このもろもろの仏世尊現に十方の清淨世界にまします。みな名を称し憶念すべし。

【9】 今くわしく無む量りよう寿じゆ仏・世自せじ在王ざいおう仏・師子しし意
い仏・法ほう意い仏・梵相ぼんそう仏・世世相そう仏・世世妙みよう仏・慈悲じひ
仏・世世王おう仏・人王にんのう仏・月徳がつとく仏・宝徳ほうとく仏・相徳そう
とく仏・大相だいそう仏・殊蓋しゆがい仏・師子しし鬘まん仏・破無はむ明みよう
仏・智華ちけ仏・多摩羅たまら跋ばつ梅檀せんだん香こう仏・持じ大だい功く徳ど
く仏・雨う七宝しつぼう仏・超ちよう勇ゆう仏・離し瞋恨しんこん仏・大だい荘し
よう嚴ごん仏・無む相そう仏・宝蔵ほうぞう仏・徳とく頂ちよう仏・多伽羅たから
香こう仏・梅檀せんだん香こう仏・蓮れん華げ香こう仏・荘しよう嚴ごん道どう路

ろ仏・竜りゆう蓋がい仏・雨華うけ仏・散さん華げ仏・華け光こう明みよう仏・日音にちおん声じよう仏・蔽へい日月にちがつ仏・琉璃るり蔵ぞう仏・梵音ぼんのん仏・浄明じようみよう仏・金蔵こんぞう仏・須しゆ弥み頂ちよう仏・山王せんのう仏・音おん声じよう自じ在ざい仏・浄じよう眼げん仏・月がつ明みよう仏・如によ須しゆ弥み山せん仏・日月にちがつ仏・得衆とくしゆ仏・華け王おう仏・梵音ぼんのん説せつ仏・世せ主しゆ仏・師子しし行きよう仏・妙みよう法ほう意い師子吼ししく仏・珠寶しゆほう蓋がい珊さん瑚ご色しき仏・破痴はち愛闇あいあん仏・水月すいがつ仏・衆しゆう華げ仏・開かい智慧ちえ仏・持じ雑宝ぞうほう仏・菩ぼ提だい仏・華け超出ちようしゆつ仏・真しん瑠璃るり明みよう仏・蔽へい日にち明みよう仏・持じ大だい功く徳どく仏・得とく正しよう慧え仏・勇健ゆうごん仏・離り詔曲てんごく仏・除悪じよあく根栽こんさい仏・大香だいこう仏・道歎どうたん仏・水香すいこう仏・海雲かいうん慧遊えゆ仏・徳とく頂ちよう華け仏・華け莊しよう厳ごん仏・日音にちおん声じよう仏・月がつ勝しよう仏・瑠璃るり仏・梵ぼん声じよう仏・光こう明みよう仏・金蔵こんぞう仏・山せん頂ちよう仏・山王せんのう仏・音王おんのう仏・竜勝りゆうしよう仏・無む染ぜん仏・浄じよう面めん仏・月面がつめん仏・如須によしゆ弥み仏・梅檀せんだん香こう仏・威い勢せい仏・然灯ねんとう仏・難なん勝しよう仏・宝徳ほうとく仏・喜き音おん仏・光こう明みよう仏・竜勝りゆうしよう仏・離垢りく明みよう仏・師子しし仏・王王おうおう仏・力りき勝しよう仏・華け園おん仏・無畏むい明みよう仏・香こう頂ちよう仏・普ふ賢げん仏・普華ふけ仏・宝相ほうそう仏を説こう。 >これらの諸仏世尊は現に十方の清浄世界におられる。皆その名を称え憶念おくねんせよ。

弥陀章

阿弥陀 あみだ

極楽浄土において衆生を救済するとされる仏。弥陀とも略称される。《無量寿経》によれば、過去世に法蔵比丘が世自在王如来のもとで四十八の誓願をたて、長期間の修行を果たし、現在では阿弥陀仏となり、極楽浄土の主となつて、その浄土へ往生を願う衆生を摂取するという。四十八の誓願のうち第十八願は阿弥陀仏を念ずれば極楽往生できるというもので、後世の中国、日本では称名念仏の根拠とされた。この仏はサンスクリット文献では Amit' bha (無量光) Amit' yus(無量寿)として現れるが、阿弥陀はおそらくこの前半部 amita(無限)の方言であろう(他にも説がある)。阿弥陀仏は大乗仏教の仏としてクシャーナ時代の初期(2世紀)に登場したらしいが、その起源に関してイラン思想の影響がいわれている。1977年7月にインドのマトゥラー博物館が入手した、足だけを残す仏の台座に「この像が阿弥陀 Amit' bha であることを示す文字があった。台座が奉獻された時代はフビシユカ Huvio ka 王の28年

(2世紀後半)と記されている。《無量寿経》が中国で翻訳されたのは252年であるが、それより前に安世高や支婁婁識(しるかせん)(いずれも2世紀)が同系の経を翻訳したという伝承がある。クシャーナ時代には北西インドにクシャーナの王たちが信奉するゾロアスター教系の信仰が広まったとみられ、クシャーナの貨幣には太陽神ミイロが表現され、また神や王の姿には光線や索がそえられており、(無量の光)を属性とする仏の信仰を生み出す背景は十分にあった。またオリエント(イランを含む)のメシア思想も無視しえない。阿弥陀仏は衆生を救済する仏として、従来の自力仏教の伝統のなかに他力仏教という新しい要素をもたらした。自力仏教においては阿弥陀仏は観想の対象としての意味をもち、修行者の成仏の意志を励ますものとなった。密教では絶対者の顕現の一つとしてそのパンテオンに組み入れられた。三身 *tri-kaya*、*ya* 説では報身とされる。観音、勢至を脇侍とする。 定方里

「日本における阿弥陀信仰」 阿弥陀信仰は中央アジアを経て、中国に伝わった。中国でこの信仰が高まるのは3世紀後半から5世紀以後である。日本へは7世紀のはじめに伝わった。人びとをひきつけたのは《無量寿経》《観無量寿経》《阿弥陀経》であり、これらは阿弥陀仏とその浄土を語り、阿弥陀仏の救済が衆生の極楽浄土への往生で実現されることをのべている。奈良時代以前の阿弥陀信仰は弥勒信仰と混在した形であり、追善的性格が濃厚であった。奈良時代の後期に浄土変相図がつくられ、阿弥陀仏と浄土への観想に関心が寄せられたが、往生を願う中心に死者だけでなく、自己を据えるようになってきた。阿弥陀仏とともに、その西方の浄土が日本人の心にしみついたのは平安時代からである。

阿弥陀信仰の本格的展開のきっかけをなしたのは比叡山の不断念仏であり、源信の《往生要集》であった。阿弥陀信仰が成熟したのは平安時代中・末期である。阿弥陀堂、迎接堂が建てられ、聖衆来迎図が描かれ、迎講、往生講、阿弥陀講などが営まれた。信仰者は当初僧侶・貴族層であったが、官人、武士、農民、沙弥など各層に及び、奴婢、環児など卑賤のものも阿弥陀信仰を精神的支柱としていた。(往生伝)はこれら信仰者の往生の証の書であるが、10世紀末から約2世紀の間に、慶滋保胤の《日本往生極楽記》以下「種類も著された。鎌倉時代になると、阿弥陀信仰は質的に飛躍した。本願、往生、名号などに関する教学が深まり、いわば念仏宗ともいうべき新宗派、すなわち法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、一遍の時宗が成立した。日本での阿弥陀信仰の特色は、阿弥陀仏の(来迎引接)と、行者の(極楽往生)に特別の関心が寄せられていたこと、阿弥陀仏の(本願)への絶対的な帰信がみられたこと、念仏が自身の(滅罪)と死者への(追善)に最適と考えられたことである。阿弥陀仏への帰依を本旨とした宗派(浄土宗、西山系の浄土宗、浄土真宗、融通念仏宗など)の信者は、今日、全仏教徒の約5分の2を占め、阿弥陀仏を本尊とする寺院は全寺院の半数近くに達している。

伊藤 唯真

「図像」 阿弥陀如来は浄土教信仰の主尊であり、したがって浄土教美術の中心的尊像である。薬師如来像とは異なり手に持物はないが、さまざまな印

相(いんそう)(手の形)で表現され、印相の違いにより与願・施無畏印、転法輪印(説法印)、定印、来迎印の像の3種に大別できる。

与願・施無畏印の像は、左手は下げて右手は掌を外に向けて上げる。転法輪印の像は、両手を胸前にあげ、左手は大指(親指)と中指をつけて掌を内に向け、右手は大指と頭指(人指し指)をつけて掌を外に向ける。これは阿弥陀如来が説法する姿を写すもので、阿弥陀浄土図、観経变相図などの画像に表される。与願・施無畏印と転法輪印は釈迦如来像にも表されており、阿弥陀特有の印相ではないが、阿弥陀には比較的古い時代から用いられたと推測される。定印の像は、腹の前で両手掌を上に向けて両手指を交差し、左右の頭指を立てて背中合せにし、その上に左右の大指を置く。《両界曼荼羅》のうち胎藏界の無量寿如来と金剛界の阿弥陀如来に表されており、平安時代の阿弥陀堂本尊(彫像)はこの印相の像である。来迎印は、両手とも大指と頭指とを合わせたまま右手は上げ左手は下げ、掌はいずれも外に向ける。往生者を迎える姿として表現されている。

「作例」 西北インドのガンダーラ地方において仏教の造像活動が活発になる1~2世紀ごろ、北西インドでは大乘仏教がかなり広まり、阿弥陀信仰が行われていても不思議でない状況であったとされているが、その時代に造られた阿弥陀像と断定できる完全な作例はまだ報告されていない。西域ではトゥルフアン地方に大乘仏教が伝えられたが、西域の特色を示す阿弥陀像は発見されていない。注目すべきはトゥルフアン東部のトユク(吐峪溝)から発見された中国唐代の大暦9年(721)の銘をもつ阿弥陀浄土図断片(絹絵)である。8世紀のトゥルフアン地方では、仏教東漸の方向とは逆に唐代美術の影響が西方に及んだことをこの断片は示している。中国においてもこの頃から阿弥陀如来を表現することが盛んになった。竜門石窟では9世紀に阿弥陀像が造られているが、著名な作例としてはアメリカのボストン美術館蔵の隋の開皇13年(593)銘を持つ《青銅阿弥陀如来像》がある。また、敦煌石窟では初唐時代から阿弥陀浄土図や観経变相図が数多く描かれた。彫像は左右に観世音菩薩、勢至菩薩を脇侍にした三尊形式の像で、与願・施無畏印が多い。朝鮮においても9世紀には阿弥陀如来像が造られたと考えられている。辛卯銘《金銅三尊仏》は517年、癸酉銘《全氏阿弥陀仏三尊石像》(ソウル、国立中央博物館)は978年の造像と推定され、ともに右手は施無畏印である。左手は、前者が与願印に似るが無名指、小指を曲げ、後者は掌を上にして胸前に添える。また、11世紀末ごろの作と推定されている慶尚北道の軍威三尊石窟本尊も脇侍の表現によって阿弥陀如来と考えられる。

日本には7世紀中ごろに阿弥陀如来像が登場した。現存する作例は7世紀末ごろのものばかりだが、東京国立博物館蔵法隆寺献納宝物中の小金銅仏のうち(山田殿像)と言われる金銅阿弥陀三尊像や法隆寺蔵《橋夫人厨子》の本尊は与願・施無畏印で、同寺金堂壁画(9号壁)の《阿弥陀浄土図》や同寺蔵の厨子入銅板押出阿弥陀三尊及僧形像の中の阿弥陀像は転法輪印の像であり、その当時の中国と朝鮮における阿弥陀像と同形式の古様を伝えている。さらに

奈良の当麻(たいま)寺には観経変相図があり《当麻曼荼羅》と呼ばれている。平安時代前期に入ると阿弥陀は、密教の両界曼荼羅図の中に定印の座像として表現されることはあるが、単独で造像されることはなかった。平安中・後期に浄土教が盛んになって各地に阿弥陀堂が建立されると、その本尊に定印の阿弥陀如来座像が造られた。定印の阿弥陀像には常行三昧など観法修行の本尊としての性格が認められることが指摘されている。浄土教信仰は、やがて阿弥陀如来が往生者を極楽から迎えに来る姿、すなわち来迎印の阿弥陀像を表現する。《阿弥陀聖衆来迎図》がその代表例で、さまざまな形式に表現された。特殊な例としては、説法印の阿弥陀如来が山の背後から巨大な上半身を現す《山越阿弥陀図》、後方を振り返る姿の《見返り阿弥陀像》(京都禅林寺)などが造られた。鎌倉時代以降は、当麻寺の《当麻曼荼羅》や長野善光寺の本尊阿弥陀三尊像(秘仏)が盛んに模作された。後者は《善光寺式阿弥陀三尊》と呼ばれている。なお、九品阿弥陀の印相について、上品・中品・下品の各上生の印を定印とし、同じく中生印を説法印に、下生印を来迎印に当てて九種の印を組み合わせたものが、《仏像図彙》(江戸時代)などに見られ、現在も一般の概説書等に取り上げられているが、これらを説く儀軌はなく、しかも近世以前にはそれに基づいて造像されたものは存在しないことから、この九品印は近世に考案されたものと推定され、阿弥陀の印相としては説明すべきではないとの提言がなされている。

関口 正之 (世界)

(C) 1998-2000 Hitachi Systems & Services, Ltd. All rights reserved.

阿彌陀佛本願如是 若人念我稱名自歸 即入必定得阿耨多羅三藐三菩提 是故常應憶念

【10】 阿弥陀仏の本願はかくのごとし、「もし人われを念じ名を称してみづから帰すれば、すなはち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得」と。このゆゑにつねに憶念すべし。

【10】 阿弥陀仏の本願はこの通りである。「もし人あってわたしを念じて名を称え帰依すれば、そのとき必定（正定聚）に入つて、ついに無上仏果を得る」と。こういうわけであるから常に憶念すべきである。

以偈稱讚

【11】 偈をもつて「阿弥陀仏を」称讚せん。

【11】 偈をもつて阿弥陀仏をほめたたえよう。

無量光明慧 身如眞金山

我今身口意 合掌稽首禮

金色妙光明 普流諸世界

無量光明慧あり、身は眞金山のごとし。

われいま身口意をもつて、合掌し稽首し礼したてまつる。
金色の妙光明、あまねくもろもろの世界に流れて、

はかりない智慧の光明に かがやくおん身は黄金の山のように
わたしはいま身しん口意くいをもつて 合掌しぬかずき礼拝したてまつる
金色の妙なる光明は あまねくあらゆる世界にゆきわたり

隨物増其色 是故稽首禮

若人命終時 得生彼國者

即具無量徳 是故我歸命

物に随ひてその色を増す。このゆゑに稽首し礼したてまつる。もし人命終の時に、かの国に生ずることを得れば、すなはち無量の徳を具す。このゆゑにわれ歸命したてまつる。

機類に随つてその色を示す それゆえぬかずき礼したてまつる
もし 人が命終つて かの国に生まれることを得たならば
すなわち量りなき徳をそなえる それゆえわたしは歸命したてまつる

人能念是佛 無量力威徳

即時入必定 是故我常念

彼國人命終 設應受諸苦

人よくこの仏の無量力威徳を念ずれば、即時に必定に入る。このゆゑにわれつねに念じたてまつる。かの国の人命終して、たとひもろもろの苦を受くべきも、

人がよくこのみ仏の はかりなき功徳を念ずれば
そのとき不退の位に定まる それゆえわたしは常に念じたてまつる
かの浄土の人が迷いの世界に出て たとい いろいろの苦を受けるとしても

不墮惡地獄 是故歸命禮

若人生彼國 終不墮三趣

及與阿修羅 我今歸命禮

惡地獄に墮せず。このゆゑに歸命し礼したてまつる。
もし人かの国に生ずれば、つひに三趣
および阿修羅に墮せず。われいま歸命し礼したてまつる。

惡地獄に墮ちることはない それゆえ歸命し礼したてまつる
もし 人かの国に生まれたならば とこしえに三惡趣
阿修羅に墮ちない わたしは今歸命し礼したてまつる

三悪趣　さんあくしゆ　さんまくしゆ　生あるものが行いつくった悪行の結果として、死後生まれる世界またはあり方を、趣（または道）といい、悪趣に地獄・餓鬼・畜生の三つを数える。この三つと修羅・人間・天を合わせて六道という。輪廻の内にある生存のあり方である。
（仏教語）

人天身相同　猶如金山頂

諸勝所歸處　是故頭面禮

其有生彼國　具天眼耳通

人天の身相同じくして、なほ金山の頂のごとし。
諸勝の所歸の処なり。このゆゑに頭面をもつて礼したてまつる。
それかの国に生ずることあれば、天眼耳通を具して、

人天の身相は同じくて　あたかも金山の頂のようである
いろいろのすぐれた所を集めている　それゆゑぬかずき礼したてまつる
かの国に生まれたならば　天眼通や天耳通をそなえて

天眼　てんげん

[s : divya_cak_us] 詳しは〈天眼通〉(divya_cak_ur_abhij)ともいう。

〈五眼(ごげん)〉や〈三明(さんみょう)〉の一つで、神通の一種。超人的な視力を指す。可視的な物質も突き通して見抜く視力。あらゆるものを見通す能力。未来の衆生の死と生の相を見通すという意味では、〈死生智証明〉あるいは〈天眼明〉に同じ。「此の人(阿那律)は天眼第一の御弟子なり。三千大千世界を見る事、掌(たなごころ)を見るがごとし」〔今昔(2_19)〕。
（岩波）

天眼通　てんげんつう　超自然的な眼。死後の世界を見通すこと。すなわち天界と地獄とを見ること。人の素質から未来の運命を予測する智慧のこともさす。六神通の一つ。
（仏教語）

天耳通　てんにつう　六神通の一つ。自在に一切の言語・音声を聞くことのできる通力。これに二種類ある。四禪を修して得た定力によって、天界の四大を發得し、天耳の作用をする修得と、四禪天に生まれた果報として得た報得とである。
←六神通
（仏教語）

十方普無礙　稽首聖中尊

其國諸衆生　神變及心通

亦具宿命智　是故歸命禮

十方にあまねく無礙なり。聖中の尊を稽首したてまつる。
その国のもろもろの衆生は、神変および心通、
また宿命智を具す。このゆゑに帰命し礼したてまつる。

十方にあまねくさえぎられる所がない 聖中の尊である如来にぬかずきたてまつる
その国のすべての人々は 神足通および他心通
また宿命通をそなえている それゆえ帰命し礼したてまつる

神変

心通

宿命智

生彼國土者 無我無我所

不生彼此心 是故稽首禮

超出三界獄 目如蓮華葉

かの国土に生ずれば、我なく我所なし。

彼此の心を生ぜず。このゆゑに稽首し礼したてまつる。

三界の獄を超出して、目は蓮華葉のごとし。

かの国に生まれた者は 我執がなくまたものに執ずることがなく
彼此差別の心を起さぬ それゆえぬかずき礼したてまつる
三界の迷いを出て 目は蓮華のはなびらのよう

我所

我之所有の略 我所事ともいう。わがもの。わがものという觀念。自我に
所属されると執着されるもの。我の所有するもの。我のはたらき。

(仏教語)

聲聞衆無量 是故稽首禮

彼國諸衆生 其性皆柔和

自然行十善 稽首衆聖王

声聞衆無量なり。このゆゑに稽首し礼したてまつる。
かの国のもろもろの衆生、その性みな柔和にして、
自然に十善を行ず。衆聖の王（阿弥陀仏）を稽首したてまつる。

そのような声聞衆が無量である それゆえぬかずき礼したてまつる
かの国のすべての衆生は その性質が柔和で
自然に十善を行ずる 聖者たちの王である弥陀にぬかずきたてまつる

十善戒

世俗の人の守るべき十の戒め。十善業道 *Sisāsa kusālakamma-paṭṭhāṇ* を行ず
ることをもって戒となす立場。慈雲尊者飲光はもっぱらこれを守るべきこ
とを説いた。

- 1 不殺生(ふせつしよう) 生きものを殺すことなかれ
- 2 不偷盜(ふちゆうとう) 盗むことなかれ
- 3 不邪淫(ふじやいん) 男女の道を乱すなかれ
- 4 不妄語(ふもうご) 偽りを言うなかれ

- 5 不悪口(ふあくく) 　　ふざけたことばを言うなかれ
- 6 不両舌(ふりょうぜつ) 　悪口を言うなかれ
- 7 不綺語(ふきご) 　　なかがいさせるようなことを言うなかれ
- 8 不貪欲(ふとんよく) 　貪るなかれ
- 9 不瞋恚(ふしんに) 　怒るなかれ
- 10 不邪見(ふじやけん) 　人間生存の理法についてよこしまな見解をい
だくなかれ 　『開日抄』 (仏教語)

十善 じゅうぜん 　　仏教で善とは「楽(らく)の果(か)をもたらす行為をいうが、身・語・意(身口意(しんくい))の三方面におけるその代表的な十の行為が十善である。まず身の行為に關し、

- ・ 不殺生(ふせつしよう)
 - ・ 不偷盜(ふちゆうとう)
 - ・ 不邪淫(ふじやいん)
 - ・ 不妄語(ふもうご) 　　語の行為に關し
 - ・ 不悪口(ふあくく)
 - ・ 不両舌(ふりょうぜつ)
 - ・ 不綺語(ふきご) 　　意の行為に關して、
 - ・ 無貪(むとん)
 - ・ 無瞋(むしん)(瞋恚(しんに))
 - ・ 正見(しようけん)
- (八正道(はつしようどう)がいわれる(受十善戒經, 十善業道經など)・大乘の戒(戒律)は、この十善業道を基本とする。この反対を、十悪, 十不善業などという。)
- (岩波)

從善生淨明 無量無邊數 　　二足中第一 是故我歸命 　　若人願作佛 心念阿彌陀

善より淨明を生ずること、無量無邊數にして、
二足のなかの第一なり。このゆゑにわれ歸命したてまつる。
もし人仏に作らんと願じて、心に阿彌陀を念ずれば、

善根より智慧を生ずる 　　そういう人が無數である
人天の中の最もすぐれた方である 　　それゆゑわたしは歸命したてまつる
もし 人が仏になろうと願って 　　心に阿彌陀仏を念ずれば

應時爲現身 是故我歸命 　　彼佛本願力 十方諸菩薩 　　來供養變法 是故我稽首

時に応じてために身を現したまふ。このゆゑにわれ、かの仏の本願力を帰命したてまつる。十方のもろもろの菩薩、来りて供養し法を聴く。このゆゑにわれ稽首したてまつる。

その時に応じて身を現わしたもう それゆえわたしは帰命したてまつる
かの仏の本願力によつて 十方の菩薩たちも来つて
かの仏を供養し尊い法を聴く それゆえわたしはぬかぎたてまつる

彼土諸菩薩 具足諸相好

以自莊嚴身 我今歸命禮

彼諸大菩薩 日日於三時

かの土のもろもろの菩薩は、もろもろの相好を具足し、もつてみづから身を莊嚴す。われいま帰命し礼したてまつる。かのもろもろの大菩薩、日々三時に、

かの土の菩薩たちは あらゆる相好をそなえて
みづから身をかざる わたしはいま帰命し礼したてまつる
かの諸大菩薩は 日にちにちに三回ずつ

供養十方佛 是故稽首禮

若人種善根 疑則華不開

信心清淨者 華開則見佛

十方の仏を供養したてまつる。このゆゑに稽首し礼したてまつる。もし人善根を種うるも、疑へばすなはち華開けず。信心清淨なれば、華開けてすなはち仏を見たてまつる。

十方の仏を供養する それゆえぬかぎ礼したてまつる
もし善根を積んで生れようとする 疑心の行者であれば華は開けず
本願を信ずる心の清淨な者は 華が開けて仏を見たてまつる

十方現在佛 以種種因縁

歎彼佛功德 我今歸命禮

其土甚嚴飾 殊彼諸天宮

十方現在の仏、種々の因縁をもつて、かの仏の功德を歎じたまふ。われいま帰命し礼したてまつる。その土はなはだ嚴飾にして、かのもろもろの天宮に殊なり、

十方の世界に現にまします仏たちは いろいろなわれを説いて
かの仏の功德をほめていられる ゆゑにわたしは今帰命し礼したてまつる
その国土はすべての莊嚴がととのい かのすべての天宮よりもすぐれている

功德甚深厚 是故禮佛足

佛足千輻輪 柔軟蓮華色

見者皆歡喜 頭面禮佛足

功德はなほだ深厚なり。このゆゑに仏足を礼したてまつる。仏足の千輻輪は、柔軟にして蓮華の色あり。見るものみな歡喜す。頭面をもつて仏足を礼したてまつる。

功德は甚だ深厚である。それゆゑ仏足を礼したてまつる。仏のみ足には千輻輪の相があり。柔らかで蓮華の色がある。見るものは皆歡喜する。ぬかずいて仏足を礼したてまつる。

千輻輪相

仏の具えている三十二の特徴一 普通の人と異なる相一の二つで、足の裏にある紋をいう。三十二相の一つ。一切を駕御する法王の相でおるといふ。仏の足の裏に千の車輻をもつ車輪のような模様のあること。輻は車の輪の中に、こしきと輪とを結んでさしてある矢のこと。←三十二想一 (岩波)

眉間白毫光 猶如清淨月

增益面光色 頭面禮佛足

本求佛道時 行諸奇妙事

眉間の白毫の光は、なほ清淨なる月のごとし。面の光色を増益す。頭面をもつて仏足を礼したてまつる。本仏道を求むる時、もろもろの奇妙の事を行じたまふ。

眉間の白毫の光は あたかも淨らかな月のようでお顔の輝きを増す。ぬかずいて仏足を礼したてまつる。因位にあつて仏果を求められる時、多くの尊い行を修めたもうた。

如諸經所説 頭面稽首禮

彼佛所言説 破除諸罪根

美言多所益 我今稽首禮

諸經の所説のごとし。頭面をもつて稽首し礼したてまつる。かの仏の言説したまふところ、もろもろの罪根を破除す。美言にして益するところ多し。われいま稽首し礼したてまつる。

諸經に説かれてある通りである。ぬかずき礼したてまつる。かの仏の御説法は、すべての罪根を除かれる。仏のよきお言葉は利益する所が多い。わたしは今ぬかずき礼したてまつる。

以此美言説 救諸着樂病

已度今猶度 是故稽首禮

人天中最尊 諸天頭面禮

この美言の説をもつて、もろもろの着樂の病を救ひたまふ。すでに度しいまなほ度したまふ。このゆゑに稽首し礼したてまつる。人天のなかの最尊なり。諸天頭面をもつて礼し、

このよきお言葉をもつて いろいろの樂に執着しゆうじやくする病を救いたもうすでに濟度し今なお濟度しておられる それゆえぬかき礼したてまつる 人天の中の最も尊いお方である 諸天がぬかき礼拝し

七寶冠摩足 是故我歸命

一切賢聖衆 及諸人天衆

咸皆共歸命 是故我亦禮

七寶の冠足を摩ぶ。このゆゑにわれ歸命したてまつる。一切の賢聖衆、およびもろもろの人天衆、ことごとくみなともに歸命す。このゆゑにわれもまた礼したてまつる。

七寶の冠で仏のみ足をなでる それゆえわたしは歸命したてまつる すべての賢聖たち および多くの人天たちは みなともに歸命される それゆえわたしもまた礼したてまつる

乘彼八道船 能度難度海

自度亦度彼 我禮自在者

諸佛無量劫 讚揚其功德

かの八道の船に乗じて、よく難度海を度したまふ。みづから度しましたかれを度したまふ。われ自在者を礼したてまつる。諸仏無量劫に、その功德を讚揚せんに、

かの八道の船をもつて よくこえがたい迷いの世界を濟度する みづから仏となりあらゆる人を救われる ゆえにわたしは自在力の仏を礼したてまつる 多くの仏たちが量り知られぬながい年時とき かの仏の功德をほめたたえても

猶尚不能盡 歸命清淨人

我今亦如是 稱讚無量德

以是福因縁 願佛常念我

なほ尽すことあたはず。清淨人を歸命したてまつる。われいままたかくのごとく、無量の徳を稱讚す。この福の因縁をもつて、願はくは仏つねにわれを念じたまへ。

なおほめ尽くすことはできぬ ゆえに清浄なる徳を具そなえた仏を帰命したてまつる

わたしも今このように かの仏のはかりない徳をほめたてまつる

この福德の因縁をもつて 願わくは み仏よ常にわたしを護念せられることを

我於今先世 福德若大小

願我於佛所 心常得清淨

以此福因縁 所獲上妙徳

わが今・先世における福德、もしは大小、

願はくはわれ仏の所において、心つねに清浄なることを得ん。

この福の因縁をもつて、獲るところの上妙の徳、

わたしは今生と前世における あらゆる福德によつて

願わくは わたしは阿弥陀仏の浄土に生まれて 心いつも清浄なるを得たい

この福德の因縁をもつて 獲たところの尊い功德を

願諸衆生類 皆亦悉當得

願はくはもろもろの衆生の類も、みなまたことごとくまさに得べしと。

願わくは すべての衆生のたぐいにも 皆またことごとく得させたい

過去八仏章

又亦應念毘婆尸佛 尸棄佛 毘首婆伏佛 拘樓珊提佛 迦那迦牟尼佛 迦葉佛 釈迦牟尼佛 及
未來世彌勒佛 皆應憶念禮拜以偈稱讚

【12】また毘婆尸仏・尸棄仏・毘首婆伏仏・拘樓珊提仏・迦那迦牟尼仏・迦葉仏・釈
迦牟尼仏および未來世の彌勒仏を念ずべし。みな憶念し礼拝すべし。偈をもつて称讚
せん。

【12】また、過去の毘婆尸びばし仏・尸棄しき仏・毘び首しゆ婆ば伏ふく仏・拘樓
くる珊提さんだい伽か仏・迦那迦かなか牟尼むに仏・迦か葉しよう仏・釈しや迦か
牟尼むに仏および未來世の彌み勒ろく仏を念じ、みな憶念し礼拝せよ。偈をもつ
て称讚しよう。

毘婆尸世尊 無憂道樹下

成就一切智 微妙諸功德

正觀於世間 其心得解脫

毘婆尸世尊、無憂道樹の下にして、
一切智を成就して、微妙のもろもろの功德あり。
まさしく世間を觀じ、その心解脫を得たまふ。

毘婆尸世尊は 無憂むう道樹どうじゆの下で
すべての法を知る智慧と 微妙妙みようのもろもろの功德を成就せられた
まさしく世間を觀じて その心は迷いを離れたもうた

我今以五體 歸命無上尊

尸棄佛世尊 在於邪他利

道場樹下坐 成就於菩提

われいま五体をもつて、無上尊を歸命したてまつる。
尸棄仏世尊、分陀利道場樹の下にましまして坐し、菩提を成就したまふ。

わたしは今五体をもつて 無上尊に歸命したてまつる
尸棄仏世尊は 邪ふん他利たり道場樹の
下に坐されて 菩提を成就せられた

身色無有比 如然紫金山

我今自歸命 三界無上尊

毘首婆世尊 坐娑羅樹下

身色比あることなし。燃ゆる紫金山のごとし。
われいまみづから三界の無上尊を歸命したてまつる。
毘首婆世尊、娑羅樹の下に坐し、

おすがたの光は比べものがなく 輝く紫金山のようである
わたしは今みづから 三界さんがいの無上尊に歸命したてまつる
毘首婆世尊は 娑しや羅ら樹の下に坐して

自然得通達 一切妙智慧

於諸人天中 第一無有比

是故我歸命 一切最勝尊

自然に一切の妙智慧に通達することを得たまふ。
もろもろの人天のなかにおいて、第一にして比あることなし。
このゆゑにわれ一切最勝尊を歸命したてまつる。

一切の妙なる智慧に おのずから通達することができたもうた

すべての人天の中において 第一で比べものがない
それゆえわたしは 一切最勝尊に帰命したてまつる

迦求村大佛 得阿耨多羅

三藐三菩提 尸利沙樹下

成就大智慧 永脱於生死

迦求村大仏は、阿耨多羅

三藐三菩提を、尸利沙樹の下に得たまひて、
大智慧を成就し、永く生死を脱したまふ。

迦求かぐ村そん大仏は 無上菩提を

さとられたのである 尸利しり沙しや樹の下で
大智慧を成就し ながく生死をのがれたもうた

我今歸命禮 第一無比尊

迦那含牟尼 大聖無上尊

優曇鉢樹下 成就得佛道

われいま第一無比尊を帰命し礼したてまつる。

迦那含牟尼、大聖無上尊、
優曇鉢樹の下にして、仏道を成就し得て、

わたしはいま 第一無比尊に帰命し礼したてまつる

迦那かな含ごん牟尼むに 大聖無上尊は
優う曇どん鉢ば樹の下で 仏果を成就せられた

通達一切法 無量無有邊

是故我歸命 第一無上尊

迦葉佛世尊 眼如雙蓮華

一切法は無量にして辺あることなしと通達したまふ。
このゆゑにわれ第一無上尊を帰命したてまつる。
迦葉仏世尊、眼は双蓮華のごとし。

すべての法に通達すること 量りなくほとりがない
それゆえわたしは 第一無上尊に帰命したてまつる
迦葉仏世尊は おん眼が二つの蓮華のようである

弱拘樓陀樹 於下成佛道

三界無所畏 行歩如象王

我今自歸命 稽首無極尊

弱拘樓陀樹の下において仏道を成ず。

三界に畏れるところなし。行歩すること象王のごとし。
われいまみづから無極尊を帰命し稽首したてまつる。

弱拘にく楼陀るだ樹の下で 仏果を成就せられた
三界に畏れるところなく 歩まれるすがたは象王のようである
わたしは今みづから 無極尊に帰命しぬかずきたてまつる

ニヤグローダ 弱拘盧陀樹 *Sriyagrodha* *P-nigrodha* 原語は下方に生育するもの、下に根をおろす樹の意。榕樹と漢訳する。インドの無花果の樹。ハニヤン樹。長大な喬木で、枝葉がよく繁茂し、樹陰では烈しい炎日を避けることがてきる。葉は柿のごとく、花は美しくない。インドではこの樹を道端などに植え、並木とし、また旅行者の休息所としている。また、修行者がこの樹の下に止住することもある。この樹木は非常に大きくなるが、その種子はとても小さいので、どんなに微少な布施であっても仏への供養は大きな果報をもたらすと、種々の仏典に引用されている。世界最大の樹木はカルカノタ植物業にあるバナヤンの樹であるが、周囲三マイルもあり、根をおろした枝の九百余本にささえられていて、森のように見える。学名は *Ficus Indica* である。(仏教語)

釈迦牟尼佛 阿輪陀樹下

降伏魔怨敵 成就無上道

面貌如滿月 清淨無瑕塵

釈迦牟尼仏、阿輪陀樹の下にして、
魔の怨敵を降伏し、無上道を成就したまふ。
面貌満月のごとく、清淨にして瑕塵なし。

釈迦牟尼仏は 阿あ輪しゆ陀だ樹の下で
魔の怨敵を降伏し 無上のさとりを成就せられた
お顔は満月のごとく 淨らかで少しの汚れもましまさぬ

我今稽首禮 勇猛第一尊

當來彌勒佛 那伽樹下坐

成就廣大心 自然得佛道

われいま勇猛第一尊を稽首し礼したてまつる。
当來の彌勒仏、那伽樹の下に坐して、
廣大の心を成就し、自然に仏道を得たまはん。

わたしはいま 勇ゆう猛みよう第一尊にぬかずき礼したてまつる
當來の世に彌勒仏は 那伽なが樹の下に坐して
廣大の心を成就せられ 自然に仏果を得たもう

功德甚堅牢 莫能有勝者

是故我自歸 無比妙法王

功德はなはだ堅牢にして、よく勝るるものあることなからん。
このゆゑにわれみづから無比妙法王に歸したてまつると。

功德は甚だ堅く これよりすぐれた者はない
それゆゑわたしはみづから 無比の妙法王に歸したてまつる

東方八仏章

復有徳勝佛 普明佛 勝敵佛 王相佛 相王佛 無量功德明自在王佛 藥王無閼佛 寶遊行佛 寶華佛 安住佛 山王佛 亦應憶念恭敬禮拜以偈稱讚

【13】 また徳勝仏・普明仏・勝敵仏・王相仏・相王仏・無量功德明自在王仏・薬王無閼仏・宝遊行仏・宝華仏・安住仏・山王仏まします。また憶念し恭敬し礼拝すべし。偈をもつて称讚せん。

【13】 >また、徳とく勝しよう仏・普ふ明みよう仏・勝敵しようちやく仏・王相おうそう仏・相王そうおう仏・無む量りよう功く徳どく明みよう自在王ざいおう仏・薬王やくおう無礙むげ仏・宝ほう遊ゆ行きよう仏・宝ほう華け仏・安あん住じゅう仏・山王せんのおう仏がおられる。これらの仏たちをもまた憶念し恭敬し礼拝すべきである。偈をもつて称讚しよう。

無勝世界中 有佛號徳勝

我今稽首禮 及法寶僧寶

隨意喜世界 有佛號普明

無勝世界のなかに、仏ましまして徳勝と号す。
われいまおよび法宝・僧宝を稽首し礼したてまつる。
随意喜世界に、仏ましまして普明と号す。

無む勝しよう世界の中に仏まします 徳勝と申しあげる
わたしは今仏及び法宝・僧宝に むかざき礼したてまつる
随ずい意喜いき世界に仏まします 普明と申しあげる

我今自歸命 及法寶僧寶

普賢世界中 有佛號勝敵

我今歸命禮 及法寶僧寶

われいまみづからおよび法宝・僧宝を帰命したてまつる。
普賢世界のなかに、仏ましまして勝敵と号す。
われいまおよび法宝・僧宝を帰命し礼したてまつる。

わたしは今みづから 仏及び法宝・僧宝に帰命したてまつる
普ふ賢げん世界の中に仏まします 勝敵と申しあげる
わたしは今仏及び法宝・僧宝に 帰命し礼したてまつる

善淨集世界 佛號王幢相

我今稽首禮 及法寶僧寶

離垢集世界 無量功德明

善淨集世界あり、仏を王幢相と号す。
われいまおよび法宝・僧宝を稽首し礼したてまつる。
離垢集世界の無量功德明、

善ぜん淨集じょうじゅう世界に仏まします 王おう幢相どうそうと申しあげる
わたしは今仏及び法宝・僧宝に ぬかずき礼したてまつる
離垢りく集しゅう世界に 無量功德明仏がおられる

自在於十方 是故稽首禮

不誑世界中 無礙藥王佛

我今頭面禮 及法寶僧寶

十方に自在なり。このゆゑに稽首し礼したてまつる。
不誑世界のなかの無礙藥王仏、
われいま頭面をもつておよび法宝・僧宝を礼したてまつる。

十方において自在にはたらきたもう それゆえぬかずき礼したてまつる
不ふ誑おう世界の中に 無礙藥王仏がまします
わたしは今仏及び法宝・僧宝に ぬかずき礼したてまつる

今集世界中 佛號寶遊行

我今頭面禮 及法寶僧寶

美音界寶花 安立山王佛

今集世界のなかの仏を宝遊行と号す。
われいま頭面をもつておよび法宝・僧宝を礼したてまつる。
美音界の宝華安立山王仏、

今こん集じゅう世界の中に仏まします 宝遊行と申しあげる
わたしは今仏及び法宝・僧宝に ぬかずき礼したてまつる

美み音おん世界には 宝華安あん立りゆう山王せんとう仏がおられる

我今頭面禮 及法寶僧寶

今是諸如來 住在東方界

我以恭敬心 稱揚歸命禮

われいま頭面をもつておよび法寶・僧寶を礼したてまつる。
いまこのもろもろの如來、住して東方界にまします。
われ恭敬の心をもつて稱揚し歸命し礼したてまつる。

わたしは今仏及び法寶・僧寶に ぬかずき礼したてまつる
今この仏たちは 東方の世界におられる
わたしは恭敬の心をもつて 讚嘆し礼拝したてまつる

唯願諸如來 深加以慈愍

現身在我前 皆令目得見

ただ願はくはもろもろの如來、深く加するに慈愍をもつてし、
身を現じてわが前にましまして、みな目をして見ることを得しめたまへと。

願わくは この仏たち 深く慈悲を加えたもうて
わたしの前にすがたを現わし 皆まのあたり見せしめられることを

三世諸仏章

復次過去未來現在諸佛 盡應總念恭敬禮拜以偈稱讚

【14】 また次に過去・未來・現在の諸仏、ことごとく総じて念じ恭敬し礼拝すべし。
偈をもつて稱讚せん。

【14】 >また、次に過去・未來・現在の諸仏をことごとく総じて念じ恭敬し礼拝せよ。
偈をもつて稱讚しよう。

過去世諸佛 降伏衆魔怨

以大智慧力 廣利於衆生

彼時諸衆生 盡心皆供養

過去世の諸仏、もろもろの魔怨を降伏し、
大智慧力をもつて、広く衆生を利す。
かの時のもろもろの衆生、心を尽してみな供養し、

過去世の諸仏は 多くの魔の怨敵を降伏し
大智慧力をもつて 広く衆生を利益された
かの時の衆生たちは 心をこめてみな供養し

恭敬而稱揚 是故頭面禮

現在十方界 不可計諸佛

其數過恒沙 無量無有邊

恭敬して稱揚す。このゆゑに頭面をもつて礼したてまつる。
現在十方界の不可計の諸仏、
その數恒沙に過ぐ。無量にして辺あることなし。

恭敬し稱揚した それゆえぬかずき礼したてまつる
現に十方の世界におられる 計りしられぬ仏たちは
その數 恒河の砂よりもこえて 無量無辺である

慈愍諸衆生 常轉妙法輪

是故我恭敬 歸命稽首禮

未來世諸佛 身色如金山

もろもろの衆生を慈愍し、つねに妙法輪を轉じたまへり。
このゆゑにわれ恭敬し、歸命し稽首し礼したてまつる。
未來世の諸仏、身色金山のごとく、

すべての衆生をあわれみ 常に妙法を説いておられる
それゆえわたしは恭敬し 歸命しぬかずき礼したてまつる
未來世の諸仏は おすがたは金山のごとく

光明無有量 衆相自莊嚴

出世度衆生 當入於涅槃

如是諸世尊 我今頭面禮

光明量りあることなし。衆相みづから莊嚴す。
出世して衆生を度し、まさに涅槃に入りたまふべし。
かくのごときもろもろの世尊、われいま頭面をもつて礼したてまつると。

光明は量りなく あらゆる相好をおのずから飾る
世に出て衆生を濟度せられ そして涅槃に入られるであろう
こういう仏たちを わたしはいまぬかずき礼したてまつる

諸大乘菩薩章

復應憶念諸大菩薩 善意菩薩 善眼菩薩 聞月菩薩 尸毘王菩薩 一切勝菩薩 知大地菩薩 大藥菩薩 鳩舍菩薩 阿離念彌菩薩 頂生王菩薩 喜見菩薩 鬱多羅菩薩 薩和檀菩薩 長壽王菩薩 羣提菩薩 韋藍菩薩 跋菩薩 月蓋菩薩 明首菩薩 法首菩薩 成利菩薩 彌勒菩薩 復有金剛藏菩薩 金剛首菩薩 無垢藏菩薩 無垢稱菩薩 除疑菩薩 無垢德菩薩 網明菩薩 無量明菩薩 大明菩薩 無盡意菩薩 意王菩薩 無辺意菩薩 日音菩薩 月音菩薩 美音菩薩 無盡意菩薩 意王菩薩 無邊意菩薩 日音菩薩 月音菩薩 美音菩薩 大音聲菩薩 堅精進菩薩 常堅菩薩 堅發菩薩 莊嚴王菩薩 常悲菩薩 常不輕菩薩 法上菩薩 法意菩薩 法喜菩薩 法首菩薩 法積菩薩 跋陀波羅菩薩 法益菩薩 高德菩薩 師子遊行菩薩 喜根菩薩 上宝月菩薩 不虛德菩薩 竜德菩薩 文殊師利菩薩 妙音菩薩 雲音菩薩 勝意菩薩 照明菩薩 勇衆菩薩 勝衆菩薩 威儀菩薩 師子意菩薩 上意菩薩 益意菩薩 增意菩薩 宝明菩薩 慧頂菩薩 樂説頂菩薩 有德菩薩 觀世自在王菩薩 陀羅尼自在王菩薩 大自在王菩薩 無憂德菩薩 不虛見菩薩 離惡道菩薩 一切勇健菩薩 破闇菩薩 功德寶菩薩 花威德菩薩 金瓔珞明德菩薩 離諸陰蓋菩薩 心無閔菩薩 一切行淨菩薩 法自在菩薩 法相菩薩 明莊嚴菩薩 大莊嚴菩薩 寶頂菩薩 寶印手菩薩 常舉手菩薩 常下手菩薩 常慘菩薩 常喜菩薩 喜王菩薩 得辯才音聲菩薩 虚空雷音菩薩 持寶炬菩薩 勇施菩薩 帝網菩薩 馬光菩薩 空無閔菩薩 寶勝菩薩 天王菩薩 破魔菩薩 電德菩薩 自在菩薩 頂相菩薩 出過菩薩 師子吼菩薩 雲蔭菩薩 能勝菩薩 山相幢王菩薩 香象菩薩 大香象菩薩 白香象菩薩 常精進菩薩 不休息菩薩 妙生菩薩 華莊嚴菩薩 觀世音菩薩 得大勢菩薩 水王菩薩 山王菩薩 帝網菩薩 寶施菩薩 破魔菩薩 莊嚴國土菩薩 金髻菩薩 珠髻菩薩 如是等諸大菩薩 皆應憶念恭敬禮拜求阿惟越致地

【15】 またもろもろの大菩薩を憶念すべし。善意菩薩・善眼菩薩・聞月菩薩・尸毘王菩薩・一切勝菩薩・知大地菩薩・大藥菩薩・鳩舍菩薩・阿離念彌菩薩・頂生王菩薩・喜見菩薩・鬱多羅菩薩・薩和檀菩薩・長壽王菩薩・羣提菩薩・韋藍菩薩・跋菩薩・月蓋菩薩・明首菩薩・法首菩薩・成利菩薩・彌勒菩薩なり。

また金剛藏菩薩・金剛首菩薩・無垢藏菩薩・無垢稱菩薩・除疑菩薩・無垢德菩薩・網明菩薩・無量明菩薩・大明菩薩・無尽意菩薩・意王菩薩・無辺意菩薩・日音菩薩・月音菩薩・美音菩薩・美音声菩薩・大音声菩薩・堅精進菩薩・常堅菩薩・堅発菩薩・莊嚴王菩薩・常悲菩薩・常不輕菩薩・法上菩薩・法意菩薩・法喜菩薩・法首菩薩・法積菩薩・発精進菩薩・智慧菩薩・淨威德菩薩・那羅延菩薩・善思惟菩薩・法思惟菩薩・跋陀波羅菩薩・法益菩薩・高德菩薩・師子遊行菩薩・喜根菩薩・上宝月菩薩・不虛德菩薩・竜德菩薩・文殊師利菩薩・妙音菩薩・雲音菩薩・勝意菩薩・照明菩薩・勇衆菩薩・勝衆菩薩・威儀菩薩・師子意菩薩・上意菩薩・益意菩薩・增意菩薩・宝明菩薩・慧頂菩薩・樂説頂菩薩・有德菩薩・觀世自在王菩薩・陀羅尼自在王菩薩・大自在王菩薩・無憂德菩薩・不虛見菩薩・離惡道菩薩・一切勇健菩薩・破闇菩薩・功德宝菩薩・華威德菩薩・金瓔珞明德菩薩・離諸陰蓋菩薩・心無閔菩薩・一切行淨菩薩・等見菩

薩・不等見菩薩・三昧遊戲菩薩・法自在菩薩・法相菩薩・明莊嚴菩薩・大莊嚴菩薩・
寶頂菩薩・宝印手菩薩・常举手菩薩・常下手菩薩・常慘菩薩・常喜菩薩・喜王菩薩・
得弁才音声菩薩・虚空雷音菩薩・持宝炬菩薩・勇施菩薩・帝網菩薩・馬光菩薩・空無
閼菩薩・宝勝菩薩・天王菩薩・破魔菩薩・電德菩薩・自在菩薩・頂相菩薩・出過菩薩
・師子吼菩薩・雲蔭菩薩・能勝菩薩・山相幢王菩薩・香象菩薩・大香象菩薩・白香象
菩薩・常精進菩薩・不休息菩薩・妙生菩薩・華莊嚴菩薩・觀世音菩薩・得大勢菩薩・
水王菩薩・山王菩薩・帝網菩薩・宝施菩薩・破魔菩薩・莊嚴国土菩薩・金髻菩薩・珠
髻菩薩、かくのごとき等のもろもろの大菩薩まします。

みな憶念し恭敬し礼拝して阿惟越致地を求むべし。

【15】 >また、多くの大菩薩を憶念せよ。 >善ぜん意い菩薩・善眼ぜんげん菩薩・
聞月もんがつ菩薩・尸毘しび王おう菩薩・一切いつさい勝しよう菩薩・知ち大だい
地じ菩薩・大薬だいやく菩薩・鳩く舎しや菩薩・阿離あり念ねん弥み菩薩・頂生ち
ようしよう王おう菩薩・喜き見けん菩薩・鬱うつ多羅たら菩薩・和和わ檀だん菩
薩・長ちよう寿王じゅおう菩薩・羸提せんだい菩薩・韋い藍らん菩薩・睽せん菩薩・
・月蓋ががつがい菩薩・明みよう首しゅ菩薩・法ほうしゅ菩薩・法ほう利り菩薩・
弥み勒ろく菩薩である。 >また、金剛こんごう蔵ぞう菩薩・金剛こんごう首しゅ菩
薩・無垢むく蔵ぞう菩薩・無垢むく称しよう菩薩・除じよ疑ぎ菩薩・無垢むく徳と
く菩薩・網もう明みよう菩薩・無む量明りようみよう菩薩・大だい明みよう菩薩・
無む尽じん意い菩薩・意い王おう菩薩・無む辺へん意い菩薩・日音にっとな菩薩・
月音がつとな菩薩・美み音おん菩薩・美み音おん声じよう菩薩・大だい音おん声じ
よう菩薩・堅けん精しよう進じん菩薩・常じよう堅けん菩薩・堅けんぼつ菩薩・
堅莊けんそう菩薩・常じよう悲ひ菩薩・常じよう不ふ軽きよう菩薩・法ほう上じよ
う菩薩・法ほう意い菩薩・法ほう喜き菩薩・法ほう積しやく菩
薩・発ほつ精しよう進じん菩薩・智慧ちえ菩薩・浄じよう威い徳とく菩薩・那羅な
ら延えん菩薩・善ぜん思し惟ゆい菩薩・法ほう思し惟ゆい菩薩・跋ばつ陀だ波羅は
ら菩薩・法益ほうやく菩薩・高德こうとく菩薩・師子しし遊ゆ行きよう菩薩・喜き
根こん菩薩・上じよう宝月ほうがつ菩薩・不虛ふこ徳とく菩薩・竜りゆう徳とく菩
薩・文殊もんじゅ師利しり菩薩・妙みよう音おん菩薩・雲音うんのん菩薩・勝しよ
う意い菩薩・照明しようみよう菩薩・勇衆ゆうしゅ菩薩・勝しよう衆しゅ菩薩・威
儀いぎ菩薩・師子い意しし菩薩・上じよう意い菩薩・益やく意い菩薩・増益ぞうや
く菩薩・宝ほう明みよう菩薩・慧え頂ちよう菩薩・樂ぎよう説せつ頂ちよう菩薩・
有う徳とく菩薩・観かん世自せじ在王ざいおう菩薩・陀羅尼だらに自じ在ざい王お
う菩薩・大だい自じ在王ざいおう菩薩・無憂むう徳とく菩薩・不虛ふこ見けん菩薩
・離り悪道あくどう菩薩・一切いつさい勇健ゆうごん菩薩・破は闍あん菩薩・功く
徳宝どくほう菩薩・華威けい徳とく菩薩・金こん瓔珞ようらく明みよう徳とく菩薩
・離り諸しよ陰蓋おんがい菩薩・心しん無礙むげ菩薩・一切いつさい行浄ぎようじ
よう菩薩・等見とうけん菩薩・不ふ等見とうけん菩薩・三昧さんまい遊戯ゆげ菩薩

・法ほう自じ在ざい菩薩・法相ほうそう菩薩・明莊みようしよう厳ごん菩薩・大だい莊しよう厳ごん菩薩・宝ほう頂ちよう菩薩・宝ほう印手いんしゆ菩薩・常じよう挙こ手しゆ菩薩・常じよう下げ手しゆ菩薩・常じよう慘さん菩薩・常じよう喜き菩薩・喜き王おう菩薩・得とく弁才べんざい音おん声じよう菩薩・虚こ空くう雷音らいおん菩薩・持じ宝ほう炬こ菩薩・勇ゆう施せ菩薩・帝網ていもう菩薩・馬め光こう菩薩・空くう無礙むげ菩薩・宝ほう勝しよう菩薩・天王てんのう菩薩・破魔はま菩薩・電徳でんとく菩薩・自じ在ざい菩薩・頂ちよう相そう菩薩・出しゆつ過か菩薩・師子吼ししく菩薩・雲蔭うんのん菩薩・能のう勝しよう菩薩・山相せんそう幢王どうおう菩薩・香象こうぞう菩薩・大だい香象こうぞう菩薩・白びやく香象こうぞう菩薩・常精じようしよう進じん菩薩・不休ふく息そく菩薩・妙生みようしよう菩薩・華け莊しよう厳ごん菩薩・観かん世ぜ音おん菩薩・得とく大勢だいせい菩薩・水王すいおう菩薩・山王せんのう菩薩・帝網ていもう菩薩・宝ほう施せ菩薩・破魔はま菩薩・莊しよう厳ごんこく土ど菩薩・金髻こんけい菩薩・珠髻しゆけい菩薩などの多くの大菩薩がおられる。ゝみな憶念し恭敬し礼拝して不退の位を求めべきである。

聖典講讚

易行品

湯次了榮

前に於て、易行道質問の第一段が終り、今は第二段の略読である。すなはち易行道を廣読する前に於て、先づ問者を叱責してをられ、後に難易二道を判別されてゐる。随て此の略読が前後二段に分れてゐる。

前段 問者叱責

諸佛の易行を聞きたいと問ふ如きは、これ懦弱怯劣であつて、大なる希望を持たぬ者の言ふことであり、訣して丈夫志幹のものゝ言ふことではない。一度び発願して菩提を求むるに當つては、初地不退位に至るまでは、飽まで身命を惜まず、昼夜を分たすして、精進しなければならぬではないか、『菩提資糧論』の中にも・既に説いてあるやうに、常に勤行精進して、頭髮に火のついたのを拂ふ如く、重い荷を背に負ふやうに、菩提を求めなければならぬ。彼の自力一點張りで、菩薩の死とまで排斥さるゝ、二乗を求むるのでさへ、日夜に勤行精進してゐるではないか。況や大菩提心を發して、自己を完成し、他人を濟度せんとするほどの、自利利他の菩薩道の行者は、その億倍もの努力精進がなくてはならないのである。『大寶積經』の中に、發願して佛果を求むる薯は、三千大千世界を挙ぐるよりも重いことであると、説かれてある。それゆへ不退に入る方法は至難であつて、久しうして乃ち得べきものである。依て易行で不退を得んとする如きは、是れ怯弱下劣の言であつて、大人志幹の説ではない、それでも必ず易行の方便が聞きたいのならば、これからそれを説いて聞かせよう。

如上、顯文の上では、難行のものを褒めたゝへ、易行を求むるものを叱責され、殊に二度までも懦弱怯劣であつて丈夫志幹のものゝ言ではない、怯弱下劣であつて大人志幹の説

ではないと、繰りかへされ、易行を求むるものを訶つて居らるゝのである。されどその底意には、論主龍樹の本心が秘めらるること忘れてはならないのである。すなはち論主の本心たるや、全く正反封に、むしろ難行の行者を叱責され、却て易行の求道者を褒めたゝへられてゐる氣分が、十分顯はされてゐるのである。そは若し難行の行者を褒めた言葉聞いて、自分は矢張り難行で進まうかといふやうな心では、まだまだ難行に見切りがつかぬ、自負心があるものと言はねばならぬ。そうした一時の氣まぐれで、易行を聞いてみようとするのではないか、いつれの行も及びがたき、ほんとうの下根下劣め淺間しさに、泣くより他はない自分であるといふ、自覺が出来てゐるか、それを十分顧みさしたいための叱責であると味はなくてはならぬ。少しでも難行に心淺りがあるやうでは、易行を讀いても無駄であるから、各々自心に振りかへつて、難行に堪へる機であるかどうかを、自己反省させたいといふ、この周到なる懇切な、論主の深き用意を味はなくてはならぬ。

此の論主の眞意を味ふとき、易行の求道者は、徹底して難行不堪のものであつて、曾無一善の劣機であることが、顯はされてゐるのである。

後段二道大判

重々に呵責しても、畢竟するに難行不堪の劣機であるならば、また方便なきに非すと、いかにも止むを得ずして、易行道を説くかに見えながら、さて愈々これを説くに當ては、全然端を改めて、堂々と聲高く朗かに、左の通りに述べられてゐる。

佛法有無量門

如世間道有難有易 陸道歩行則苦 水道乗船則樂

菩薩道亦如是 或有勤行精進 或有以信方便易行疾至阿惟越致者

すなはちまづ「佛法に無量の門あり」と総標し、次に譬を挙げて、「世間の道に難あり易あり、陸路の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如く」と喩説し。後に法を挙げて、「菩薩道も亦是の如し」と喩に合はせ、更に一々別釋して、「或は勤行精進のものあり、或は信方便易行を以て疾く阿惟越致地に至る者あり」と述べられてゐるのである。これを圖示すれば左の通りである。

二道 喩(世間道) 法(菩薩道)

難行道・・陸道歩行苦・・勤行精進―(久乃可得)

易行道・・水道乗船樂・・信方便易行―疾得不退

易行道の疾得不退に対すれば、難行道は「久乃可得」であること、既に述べられてゐて、自明のことであるから、この二道判にはその名目をだしてないまでのことである。而してかく止むなくして読々易行道であつて見れば、難行道の下位にあるものかといふに、決して、然らずして、全然難行易行対立的の表現形式になつてゐるのである。しかも亦前段に於ける問者叱責は、偏へに難行不堪の凡愚劣機を挙ぐるものなることゝ、合せ考ふるとき、論主の眞意は難行道の宣布にあらずして、飽まで易行道の高揚にあることが、明確に知らるゝのであり、更に推究すれば、易行道の高唱である限り、諸佛易行でなく、眞實徹

底したる彌陀易行の強調となつて居ることが、窺知さるゝのである。
今少しく難易二道を明にせんがため、難行道の勤行精進と久乃可得、及び易行道の信方便易行」と疾得不退について、その要旨を以下順次に述べてをかう。

二 勤行精進

勤行精進とは修相の困難なることを表はしてゐる語であるが、その難行と指摘され、勤修すべきもの、蓋し何ぞやと云ふに、廣くは易行道以外の一代所説の法なるも、要約すれば『華嚴經』に説くところの法である。乃ち斯經は信・解・行・證の四法について、順次に説かれてゐるから、信はいふまでもなく、教法の理解とその實行とが必要であり、殊に菩薩十地位に於ては、施・戒・忍・進・禪・慧・願・方便・力・智の十度を圓修することが読かれてゐるから、初地不退に入らんとするもの、勿論これに準すべきであつて、教法の理解既に困難であり、これが勤修また更に至難なること、縷々説明するまでもなく、何人も首肯するところである。

三 久乃可得

勤行精進これを久ふすれば、乃ち初地不退を得べしとの意であつて、終には佛果を得ることゝなつてゐる。是に於てか、難行道(聖道教)に於て、入證得果を期待すべき否やの問題に直面するのである。

げに如來の世界は絶対無限であり、吾人の世界は相對有限である。相對を如何に積むも絶対にはならず、有限を如何に延長するも無限そのものにはならない。

隨て相對有限の姿として顯はれたる迷界の吾人は、如何に長くかゝるとも、絶対無限の姿なる悟界の佛陀たり得ないのである。されど絶対は相對を該ね、無限は有限を包み、全分は部分を撰むるものである。隨て相對有限の吾人も、絶対無限の如來の大願業力に包容さるゝわけであつて、これこそ救濟の原理であり、浮土門のみが獨り可通入路である。

されど難行聖道教に於ける教法の組織たるや、一般的には眞如は無始無終であり、無明煩惱は無始有終である。而して此の無明煩惱を斷盡して眞如法性を見證することを説き、斷惑見證の修養法として、全品の無明を十品に分ち、十地位の初歡喜地より、一地々々に於て一分づゝの無明を斷じ、第十法雲地に於て斷盡し、妙覺の佛果位に入ると説いて居り、然も相對のまゝが絶対であり、絶対のまゝが相對であり、現象即実体、実体即現象であり、事を全ふじたる理であり、理を全ふじたる事であると立てゝ居るのであるから、合理的のものであつて、強ち否定すべきものでなく、また單に一方的に絶対無限のみが、相對有限を該ね包むといふことの合理的でないことをも肯定さるゝのである。要約すれば、難行聖道教それ自体の立場に於ては、合理的に教法が組織され、成佛得果不可能のものでないであつて、論主龍樹も既に久乃可得と説かれ、否定はされてゐないのである。

さは云へ、修道の難易につき、時につき、機につくとときは、末代の劣機及び難きこと勿論なること云ふまでもないのである。

四 信方便易行

信方便易行とは、易行の何物なるかを明示した語であつて、難行に対する易行のことである。信方便易行と云ふこの方便とは、方法手段のことであつて、如上、易行の質間に疾く不退に至り得る方便を問うてをり、これが略説にも汝若し不退に至る方便を聞くならと云うて、方便とは不退に至るの方法手段のことである。

然らば方法手段なるもの何ぞやと云ふに、信がそのまゝ疾く不退に至る方便であつて、信がそのまゝ易行と云ふことである、すなはち信方便易行と云はるゝ易行そのものは、信心のことである。

また信方便易行とは、信方便に依るの易行と云ふことであり、信方便に依るの稔名が易行と云はるゝのであつて、此の場合易行と指すは称名のことである、すなはち勤行精進の難行に対すれば、称名念佛の一行こそ、げに易行である。

此の信方便易行は、諸佛易行に通すること云ふまでもない、随て易行と云はるゝ信心も称名も、みなともに諸佛易行の章下にもあつて、それぞれ諸佛易行として鑿仰されてゐる。かく信方便易行は難行に対すれば、易行として一應諸佛に通ずるも、諸佛易行はこれを要するに、矢張り自力であり、たとへ浄土を説くも、結局此土入證の難行の格を脱してゐないのであるから、眞實の易行ではないのである。

これに反して、彌陀易行は他力であり、彼土得證の法であつて、眞實の易行である。すなはち彌陀易行は、如來の若不生者不取正覺の誓約によつて、彌陀の因位の萬行、果地の萬徳、悉く名號の中に撰在して、われらが往生の行体となつてをり、これを他力廻向によつて、聞信の一念に全領し、しかもその一念の當体に不退に入るのであるから、信心がそのまゝ易行と云はるゝのである。また称名が易行と云はるゝは、信方便易行に於ける方便とは無上方便のことであり、此の「無上方便を信する」といふは信心のことである、此の信心によるの易行なれば、念佛であつて、報謝行のことである。蓋し彌陀法は信心正四、構名報恩の外はないのであつて、聞其名號信心歡喜の一念に、當來の往生がきまると同時に、現生は不退轉正定聚であるから、第二念以後の称名念佛はただこれ報謝の外はないのであり、しかもこれ易行であるのである。

五 疾得不退

「易行品」一部全体は、佛果菩提を成ぜんがため、疾く不退位を得るを先決問題として、説かれてゐるのであり、此の不退位については、一般大乘教は初住不退説なること、既に後篇要義の序言に於て、その大要を述べて置いたのであるが、上の十住・十行・十廻向の三賢位と十地の聖位は、凡てこれ正定聚であり、十信の内凡は不定聚で、あり、われらの外凡は邪定聚であると言はれてゐる。此の難行道に於ける不退轉と言はれ、また正定聚と言はるるものは、三賢十地の菩薩の得るところであり、八相成道を示現し得るものであり、菩薩の現身に於て顯現し得るところのものであるから、これ實に顯益であること勿論である。されど自力を以て成するものであるから、たとへ易行の方便を以てしても、容易に得らるべきわけのものではない。

彌陀易行に於ける不退轉と言はれ、入正定聚と云はるゝものは、われらの此の身のまゝで、聞信一念の當隨に得るところの現在の利益である。彌陀章の散説には、これを「即入必定」と云ひ、偈説には、これを「一層明瞭に時の言を入れて、「即時入必定」と述べられ、疾得であり、同時であることを力説されてゐる。されど此の現生不退、入正定聚の益たるや、

われらの此の身が、そのまゝ菩薩そのものになつたわけでないから、顯益でなく全然密益なることを忘れてはならないのである。わが宗祖聖人によつて、強調さるゝ現生不退説たるや、「易行品」に淵源すること、今更言ふまでもないことである。

出家

しゅつげ

サンスクリットのプラブラジャー pravrajā、またはプラブラジタ pravrajita の訳。家を出て仏門に入ること。在家の対。家庭生活を捨て、世俗的な執着を離れて、もっぱら仏道を修行すること。またはその人をいう。仏門に入つて僧尼となることである。仏教徒の集団を構成する七衆のうち在家の優婆塞(うばそく)・優婆夷(うばい)を除く、比丘(びく)、比丘尼、式叉摩那(しきしゃまな)、沙弥(しゃみ)、沙弥尼の五衆は出家のなかに入る。鬚髮(しゆはつ)を剃り、墨染など壞色(えしき)に染めた衣をまとう状態になるので剃髮染衣(ていはつぜんえ)といひ、とくに王侯貴族の出家は落飾(らくしやく)という。また出家した者が在家俗人の生活にもどるのを還俗(げんそく)、復飾(ふくしやく)という。日本では敏達天皇のとき司馬達等の娘善信尼が出家したのが最初とされる。古代は僧となるのは官許制で、民間にははやくから官許を得ない私度僧や自由出家者が現れ、聖(ひじり)などといわれたが、そのほとんどが在俗生活を送る、いわゆる半僧半俗者であった。僧であつて、しかも家庭をもつた者も各時代にみられ、親鸞も自己の立場を非僧非俗と述べている(《教行信証》)。1872年(明治5)僧侶の肉食・妻帯・蓄髪が公許され、形態的には在俗者と変わらなくなり、出家者の世俗化に拍車を加えた。伊藤 唯真 (世界)

© 1998-2000 Hitachi Systems & Services, Ltd. All rights reserved.

家を出るといふ意。家を捨てること。在家の対。七衆の内、優婆塞、優婆夷を除く他の五衆出家に含まれる。②父母が承諾しなければ出家はできない。(維摩経弟子品) (仏教語)

中村元先生は、『ブツダの生涯』(CD)において、出家とは、今日でいう留学のようなものであると云われています。また、カウテイリア実利論には、家族が生活に困っているのに出家する人は、処罰されることになっていると云われています。

カウテイリヤ

Jump to navigationJump to search

カウテイリヤ

Chanakya artistic depiction.jpg

カウテイリヤ (画家の想像図)

別名

チャーナキヤ、ヴィシュヌグプタ

職業

大学教官、チャンドラグプタの政治顧問

著名な実績 マウリヤ朝の建国

代表作 実利論

カウテイリヤ（サンスクリット語 कौटिल्य Kautilya：紀元前350年・紀元前283年）、あるいはチャーナキヤ（サンスクリット語 चाणक्य Chanakya）、あるいはヴィシュヌグプタ（サンスクリット語 विष्णुगुप्त）は、古代インドのマガダ国マウリヤ朝初代チャンドラグプタ王（紀元前340年・紀元前293年）の宰相であり軍師であった人物。インド最初の本格的な統一王朝となったマウリヤ朝の建国の礎となったとされる。最も有名な『実利論』（サンスクリット語 अर्थशास्त्र Arthasāstra）を著したとされ[1]、近現代には「インドのマキヤヴェリ」と評されている。

カウテイリヤは紀元前324年頃のインド北西部におけるチャンドラグプタの挙兵に大きく関わったとされており、彼の補佐のもとチャンドラグプタはガンジス川中流域へと侵攻してナンダ朝の首都パータリプトラを占領し、国王ダナナンダを殺害してナンダ朝を滅ぼし、マウリヤ朝を建国した。カウテイリヤは建国されたマウリヤ朝において引き続き政治顧問の役割を果たし、事実上の宰相となっていた。また、タキシラにあった大学の教官でもあった。チャンドラグプタの死後も、彼の息子であるビンドゥサーラ王のもとで引き続き補佐を行っていたとされる。カウテイリヤの残したとされる「実利論」はサンスクリット語で書かれた冷徹な政治論であり、しばしばマキアヴェッリの『君主論』と比較される。この「実利論」は同時に、当時のマウリヤ朝やインド社会を知るための貴重な資料ともなっている。

教条主義

〔英〕dogmatism 〔独〕Dogmatismus 〔仏〕dogmatisme 哲学概念としての訳語では、独断論、定説主義とも訳されるが、教条主義といわれる場合はとくにマルクス主義内において否定的な意味でもちいられる用語である。実践による検証をへない教条（ドグマ）を無批判的に信奉したり、マルクス、エンゲルス・レーニンらの古典的規定を発展的に理解するのではなく、機械的に盲信しているような硬直した発想を非難するときに使われる。中ソ論争において中国はソ連を修正主義と批判するが、ソ連は中国を教条主義とよんで非難している。
（哲学事典）

教条主義 きょうじょうしぎ

ドグマティズム dogmatism の訳語で、元来、科学的証明なしに、ドグマ(宗教上の教義や教条)にもとづいて(世界の事象)を説明することをいう。歴史的には一般に中世のスコラ学が代表的なものといわれる。無批判的な独断にもとづくという意味で独断主義、定説主義ともいわれ、今日ではマルクス主義において否定的な意味で用いられている。ヘーゲルは教条主義を形而上学的思考として弁証法に対置して批判し、マルクス主義では、特定の理論、命題を、事

物の変化、条件や環境の変化を考慮せずに機械的に現実に適用する態度を
さして批判した。政治的には、とくに革命運動や各種の政治的急進主義の中
に、条件の変化を認めずに教義から帰結される運動や方針を実行する傾向
がみられ、しばしば教義への保守的態度と、運動をめぐる条件を無視した過
激な急進主義とを伴うこととなる。また、宗教運動などで特定の教義に固執
し、いっさいの変化を認めようとならないファンダメンタリズムも、このような態
度のあらわれである。

下斗米 伸夫 (世界)

(C) 1998-2000 Hitachi Systems & Services, Ltd. All rights reserved.

参考文献

- | | |
|--------------|------|
| 華嚴經の世界 | 山辺習学 |
| 華嚴の思想 | 鎌田茂雄 |
| 十地經 大乘仏典 8 | 荒牧典俊 |
| 善財童子の旅 | 大角修 |
| 龍樹の仏教 十住毘婆沙論 | 細川巖 |
| 聖典講讃 易行品 | 湯次了榮 |
| 真宗七祖の教学 | 寺倉讓 |
| 華嚴經 楞伽經 | 中村元 |
| 三帖和讃講義 | 柏原祐義 |
| 哲学事典 | 平凡社 |